◉国際連合大学 2010-2011年度国際教育交流事業◉

中国政府日本教職員招へいプログラム
実施報告

北京市・長沙市・上海市

2011 年 5 月 29 日（日）—6月 5 日（日）

財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

◉国際連合大学 2010-2011年度国際教育交流事業◉

中国政府日本教職員招へいプログラム
実施報告

北京市・長沙市・上海市

2011 年 5 月 29 日（日）—6 月 5 日（日）

はじめに ……2
1. 実施概要 …… 4
2. 表敬訪問 ……6
3. 学校訪問 …… 10
4. 歴史と文化訪問…… 20
5. 総合所見 …… 22
6. 課題と成果 …… 34
資 料 ……50

財団法人ユネスコ・アジア文化センター [ACCU]

はじめに

財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU：Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、1971 年（昭和 46 年）に設立された財団法人です。以来、ACCU は今日まで、主としてアジア太平洋地域のユネスコ加盟各国の文化の振興と相互理解の促進に寄与するため、文化協力、教育協力、人物交流の分野で協力･支援事業を積極的に展開してきました。

2002 年より、ACCU は、国際連合大学の委託を受け、主にアジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的として、日本政府の拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を実施してきました。この事業の一環として、同年より「ACCU 国際教育交流事業」を開始、この事業のもと、これまでに９回にわたり中国教職員の招へいプログラムを実施、これまでに述べ 1,100 名近い中国の教職員を日本に招へいしました。

翌 2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年約 10 名程度の日本教職員を中国へ派遣してきました。これら交流事業の成果が中国政府に評価され、日中国交正常化 35 周年を記念する 2007 年からは参加人数を倍増し、中国の教育部による招へいプログラムとして、日中教職員相互交流のさらなる発展を目指して実施される

ようになりました。

2011年5月29日から6月5日に実施された「中国政府日本教職員招へいプログラム」では、2010年10月に中国教職員の受け入れにご協力いただいた自治体や学校の教職員、及び2011年10月に受け入れていただく自治体や学校の教職員が参加し、北京市、長沙市、上海市での学校および教育文化施設等の訪問を通して、中国における教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、及び両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、中国の教職員、児童生徒との交流を図ることができました。また中国教育部から中国の教育課程の説明を受け、中国の教育の現状について理解を深めることができました。

このたびの訪問が、中国の教育や文化に対する参加教員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日中の教師間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました中国教育部、国際連合大学、文部科学省、外務省、及び湖南省教育庁、上海市教育委員会、上海教育国際交流協会、訪問先の学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2011年9月

財団法人ユネスコ・アジア文化センター

1. 実施概要

財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は国際連合大学の委託を受け、2002 年より「ACCU 国際教育交流事業」として中国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施してきた。このプログラムでは、これまでのべ 1100 人近い中国の教職員が日本を訪問し、両国の教職員間の交流を深め、日中両国間の相互理解と友好の促進に貢献してきた。

上記プログラムと対をなすプログラムとして、2003 年から教職員を中国へ派遣してきたが、これら交流事業の成果が中国政府に評価され、参加人数を倍増し、中国政府の教育部による招へいプログラムとして実施されることとなったのが、本「中国政府日本教職員招へいプログラム」である。

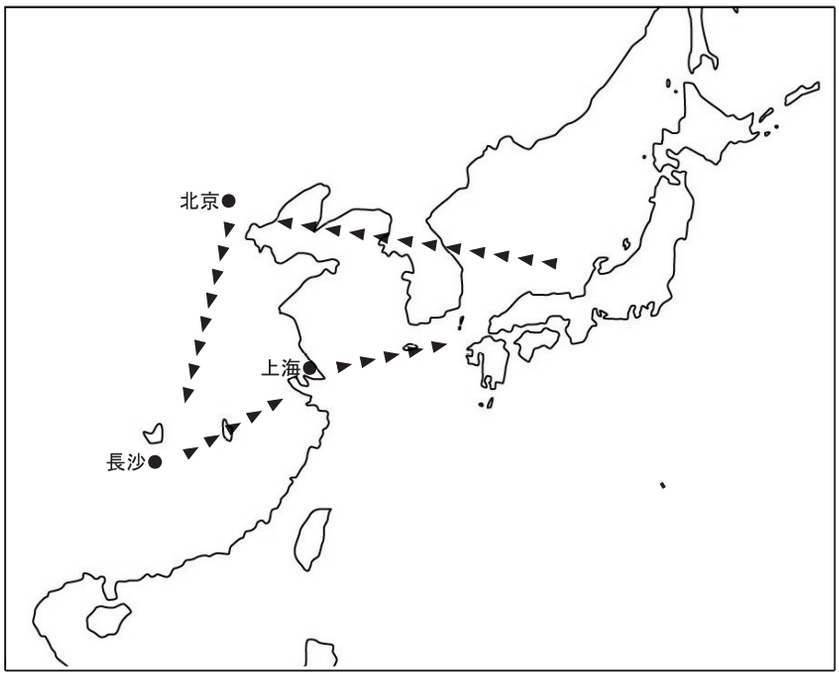
今回のプログラムは、2011 年 5 月 29 日から 6 月 5 日の 8 日間にわたって開催され、中国教育部、湖南省教育庁、長沙市教育局、上海市教育委員会の協力を得て、北京市 1 校、長沙市 3 校、上海市 1 校を訪問したほか、表敬訪問、意見交換、文化施設見学などを通じ、多くを学び、交流を果たして帰国した。

訪問団の構成は、参加者として、1）2010 年 10 月に国際教育交流事業のもと、日本を訪問した中国教職員の受入れ地である秋田県大仙市、滋賀県近江八幡市、宮城県気仙沼市、長崎県壱岐市、および長崎県の各教育委員会より推薦された教職員、2）同年訪問した東京近郊の学校の教職員、3）2011 年 10 月に中国教職員の受け入れにご協力いただく教育委員会のうち、山口県美祢市、熊本県荒尾市、東京都多摩市、徳島県の各教育委員会職員の計 20 名であった。このほか、国際連合大学、文部科学省およびユネスコ・アジア文化センターから計 5 名が同行した。訪問団の団長は鎮西学院高等学校副校長の相庭建次氏である。

出発前日の 5 月 28 日ホテルモントレ山王にて、訪問にあたってのオリエンテーションが実施された。国際連合大学大学院加藤敬事務局長、ユネスコ・アジア文化センター島津正數事務局長、文部科学省初等中等教育局参事官付斎藤康行参事官補佐の挨拶ののち、文部科学省生涯学習政策局調査企画課新井聡専門職より、「中国の教育事情について」と題して講義があった。また今年度初めての試みとして、前年度プログラム参加者の発表と意見共有会が行われ、参加者全員が訪中に際しての目的意識を高めることができた。発表にご協力いただいたのは、前年度団長である、渡辺一雄元玉川大学教育学部教授、聖徳学園中学・高等学校の斎藤恵理子教諭である。同ホテルにて行われた昼食兼懇談会では、中華人民共和国駐日本国大使館史光和一等書記官からご挨拶をいただいた。

5 月 29 日昼過ぎ、訪中団 25 名は羽田空港を出発し、同日夕刻北京首都国際空港に到着、中国教育部国際協力交流局の出迎えを受け、バスにて教育部近くの宿泊ホテルに移動した。30 日午前は中国教育部への表敬訪問を行った。学校現場の視察前に、中国側より中国の教育の概要の説明を受けたことで、教育政策の現状や課題についていっそうの理解を深めることができた。この日の教育部主催の昼食会では、在中国日本国大使館からもご出席があった。昼食後は北京第一実験小学校を訪問した。

31 日に北京首都国際空港から空路湖南省の省都である長沙市に移動した。同市は省の東部にある歴史と文化にあふれた都市である。空港で長沙市教育局職員の出迎えを受けた一行はその後バスで市内に移動、岳麓書院を見学したのち、長沙駅近くの宿泊先に到着した。6 月 1 日と 2 日は長沙市内の学校 3 校と博物館などを訪問し、学校の海外との交流や特殊教育の実践の様子に触れると共に、湖南省の歴史や文化に多くの示唆を得た。1 日の夕食後には参加者相互の意見交換のため情報共有会が開催され、課題や成果について話し合われた。3 日午前中に一行は湖南省教育庁への表敬訪問を行い、概要説明を通して湖南省の教育事情への理解を深めた後、教育庁主催昼食会に参加した。午後、



一行は長沙市から空路上海市へ移動した。

6 月 4 日は土曜日であったが、上海市内の高校を訪問し、生徒や教師と意見交換を行い、また同校の日本語を学ぶ生徒が制作した東日本大震災被災地に向けてのメッセージ集が手渡されるなど日本側にとっては意義深い訪問となった。その後の上海市教育委員会主催の昼食会では、同委員会国際交流処副処長などと懇談し、上海の教育事情の一端に触れることができた。最終日となる同日夜に参加者一同は第 2 回目の情報共有会を催し、中国訪問の成果を今後の交流にどのように発展させるかをテーマに意見を交換した。また今年度 10 月に中国教員を受け入れる自治体に対しては、前年度受入れ校や教育委員会から多くのアドバイスがあった。

6 月 5 日朝、宿泊先ホテルをチェックアウトした一行は上海浦東国際空港にて散会し、所在地にあわせ、それぞれ関西国際空港、成田国際空港、福岡空港に向け、帰国の途に着いた。

◆中国の教育に関する基礎データ

中国の総人口 1,328,020 千人

	学校数	生徒数	教員数
小学校	300,854	103,315,000	5,622,000
中学校	57,701	55,742,000	3,469,000
普通高等学校	15,206	24,763,000	1,476,000
特別支援学校	1,640	417,000	36,000

＊ 2008 年度データ（香港・マカオを含まない）。中国の初級中学が日本の中学校、高級中学が高等学校に相当。
出展：文部科学省「教育指標の国際比較」平成 23（2011）年版（学校数、教員数は国公立と私立の合計数とした。）

各都市・湖南省の人口と面積

北京市 (2009 年統計)

面積	16,410.54 ㎢
人口	1,245.8 万人

出展：JETRO　中国エリア別情報

長沙市（2008 年統計)

面積	11,819 ㎢
人口	6,417,367 人

出展：長沙市人民政府公式 HP

上海市 (2011 年統計)

面積	6340.5 ㎢
人口	1,412.32 万人

出典：JETRO 中国エリア別情報

湖南省

面積	21.18 万㎢
人口	6,925 万人

出典：湖南省教育庁 (詳細は 7 頁湖南省教育庁表敬訪問参照)

2. 表敬訪問

中国教育部［北京市］5月30日
湖南省教育庁［長沙市］6月3日

今回の表敬訪問は、首都北京と湖南省の省都である長沙で、それぞれ午前中の２時間に亘って行われた。

北京では中国全土の教育方針や現在の問題点、農業を主とする中国の地方都市を代表する長沙では、地方の教育体制など、教育の中心となる行政ではどのように取り組んでいるのか、また現代の諸問題などにも言及し説明を受けた。

中国教育部［北京市］5月30日

北京到着の翌日、中国教育部を訪れた。基礎教育一司副司長の王定華氏から中国の基礎教育体制から高等教育への取り組みについて説明を受けた。小学校から中学校の九年間の基礎教育は義務化が進んでいて、ほぼ100パーセントの入学率で、学費の無償化も保証されている。また、学校間の格差、教員の質の差を解消する教育の平等に力を注いでいるという。特に経済成長に伴い、農村から都市に出て働く労働者の子供たちは農村部に残され、就学については不確定な状況下にあることが懸念されている。

中国では視覚、聴覚、言語、知能の障害を抱えている子どものことを「もっとも愛される子供」といわれていて、その子供たちにも平等に教育を受けられるよう大きな配慮がなされている。30万人以上の県には、1校以上の特殊教育学校が設けられ、通常は生徒17人に対して教員1人の割合であるのに、障害者の場合は、生徒2人に対して教員1人の体制で臨んでいる。さらに就学前から大学までの学費は無償化と障害者の教育を重視しており、平等の教育を目指していることを強調していた。

教育内容としては、学力の向上はもちろんのこと、徳育教育といって人柄を養成するプログラムを実施中である。小学1年から3年までは品徳と生活、4年から6年は品徳と社会、中学生は思想品徳、高校生は政治品徳が科目としてプログラムに取り上げられている。

しかしこうした中国の教育の取り組みにも様々な問題が生じている。世界共通となっている子供たちのストレスやコミュニケーション不足による家籠もりで不登校の児童が増えていることである。また、子供を有名大学まで進学させたいと願う親たちが多く、子供たちを塾に通わせるなど子供の時間が少なくなっていることが上げられ、国として子供の休日の確保に取り組んでいることが報告された。

今後の課題として、今後10年間、高等教育にどのように取り組んでいくのかを検討して行かなくてはならないと王副司長は語った。　**（三好章文）**

【参加者の感想】

橋本正明……9年間の義務教育の無償化で、2000年から入学率はほぼ100%ということであった。ただ、農村部の実態については詳しい説明がなく、教育の地域間格差の解消と教育の機会均等について、実際はどの程度進んでいるのかについての話が聞きたかった。

障害者教育に関わって一番印象に残ったのは「障害児は最も愛される存在である。」という言葉である。就学前から大学まで無償にし、教育を受ける権利を保障するという施策は大変素晴らしいと思った。一方で、障害者福祉の理念としてのノーマライゼーションの考え方やそのための社会づくりへの意識はそれほど高くないように感じた。

松本紀子……経済成長著しい中国で、より質の高い教育を親から求められる都市部と教育設備も不十分な農村部との地域差が今後どのように解消されるのか興味を持った。

松嶋真美子……中国全土の教育事情と今後のビジョンについて、「9年間の義務教育の無償化と徳育の教育の重視・障害者・都市部と農村部の教育の格差の是正」の意気込みが強く感じられた。“教職員の質の向上が教育の質の向上である”というスタンスが一貫している。教職員は5年に1回の免許の更新が必要であるのに、20倍もの難関である。有名大学に入って高い教養を身に付けることが国民のあこがれである点が印象に残った。

中国教育部にて、王定華氏（前列右から３人目）とともに記念写真。

小笠原晃……平等教育、資質教育の推進、就学率のアップ、都市と農村の経済格差及び教育格差、高等教育及び特別支援教育の課題､徳育や外国語教育の重視、ＩＣＴの活用などに向けても、実験校などを設けて先進的な教育を実践している中国と感じた。

教員の研修制度や表彰制度は、「教育の質の向上は、教員の質の向上である」という考え方に基づくものと感じた｡不登校やモンスターペアレンツの問題もあり、わが子を有名大学に入れたいための受験競争があることも事実と受け止めていた。子どもたちの勉強時間が多いことは国際的調査結果を裏付けるものであり、日本の子どもたちの学ぶ必然性の欠如と比較されるものがあった。

酒井淑子……「障害を持つ子供はもっとも愛される立場にある」とのことばが特に印象に残った。ただ人口３０万人以上の都市にしか，障害者学校が設置されていないのは，障害者教育においても都市部と農村地区との格差があるように思われる。

寺尾俊二……視覚・聴覚・言語及び知的障害が特別支援教育の対象であることをあげられた。ただ、通常学級には特別支援が必要な児童生徒はいないので、どうなっているのかの疑問が残った。

湖南省教育庁［長沙市］6月3日

湖南省の省都、長沙に到着したのは出国して３日目のことである。湖南省教育庁を訪問したのは帰国の二日前のことであった。講義して頂いたのは教育庁の副庁長である陳湘生さんであった。

最初に湖南省が中国の中でどのような位置を占めているのかを、いくつかのデータを示しながら解説が始まった。

湖南省は、洞庭湖の南に位置する省である。長い歴史をもつ省で、中華民族の始祖と言われる炎帝陵がある。有名な岳麓書院があり、その門の両側に掲げられている対句の言葉のように、湘地は優れた人材を数多く輩出している地である。また、屈原が出仕していた時期もあり､端午の節句はその屈原を祝う節句である。

１. 基本状況

広さ：21 万 1800 ㎢（中国国土の 2.2 %、全国 11 番目の広さ）

行政：1 市、1 自治州、122 市区

総人口：6,925.1 万人（全国 7 位）

2010 年の GDP：1,293,000,00 元円（全国 10 位）

大学：102 校　社会人向け大学：15 校　普通高校：622 校　職業専門校：626 校　小・中学校：16,003 校

大学生:1,147 万人　高校生:131.38 万人　職業専門校:76.48 万人、　小・中学生：795.98 万人（義務教育の小学校の就学率 99.92％、中学校の就学率は 99.83％、

高校の就学率は85.02％で、全国平均を上回り、高いグループに入っている）

2. 職業教育の状況について

職業教育については、政府・企業・各団体が力を合わせ、公営と民営が共に発展する構造となっている。省の重点事項として、職業教育の基礎能力を身に付けるプロジェクトは既に始まっていて、省のモデル高等職業訓練校22校、モデル中等職業教育訓練校51校、県レベルのモデル職業訓練校41校がある。湖南の職業教育のシステムは一新され、推進されている。現在、国レベルのモデルとなる五つの高等職業訓練校があり、職業教育の改革、職業教育における人材育成の方向性が位置付けられている。

3. 高等教育（大学・大学院）の状況について

新しい大学3校、61学部がある。どの市・自治区・県にも、1大学、1校以上の高等職業訓練校があり､国民が高等教育を受けられるように配置している。2010年、大学生が131.38万人、大学入学率は25％である。国レベルの重点教科、重点研究室、逸品となる課程、教育成果など10分野の指標で、全国10位にランクされている。教育の質の向上を目指し、大学の科学技術の革新のプラットフォームの建設の強化、産学研連携と大学の科学技術の成果の社会への転化貢献を進めている。

4. 教育の国際交流と協力について

現在、湖南省の50以上の大学と100以上の中学高校はすでに30以上の国で300以上の教育機構と交流している。湖南省では300以上の学校は、毎年外国の専門家と外国人教師1500人以上を招聘している。

湖南大学、湖南農業大学、中南林業科学技術大学などの大学はそれぞれイギリス、米国、オーストラリア、カナダなどの国と国内外の学校運営の協力プロジェクトを展開している。湖南省では、韓国ホウナン大学、ロシアカザン大学、リベリア大学、カナダレジナ大学、スペインレオン大学でそれぞれ孔子学院、米国ミシシッピ州フィッシャー小学校で、孔子の教室を設立している。また、2006年から湖南省では、ボランティアを希望する300数名の中国語の教師をタイやインドネシア、米国、シンガポールなどに派遣している。2008年には中日高校交流が始まっており毎年50名が参加し､これまで200名の参加実績となっている。2010年には10名の教職員の訪問団を派遣している。2010年現在、湖南省に外国人留学生の学生募集の資格がある大学・高等専門学校20校と小学校3校がある。毎年、香港・マカオ・台湾からの5000人以上の留学生を受け入れている。中南大学、湖南大学、湖南師範大学、湘潭大学などへの香港・マカオ・台湾からの華僑の留学生は、湖南省から奨学金を受けられることになっている。

5. 今後の課題

中国政府は2010年から2020年までの教育推進計画があり、地元にも教育推進計画がある。平等教育の推進など、教育改革を推進し教育の質の向上を目指している。湖南省は人口の多い省であり、農業が主産業である。1990年から教育の重点施策は農村部の就学率アップである。20年にわたる努力が現在の99.92％の就学率である。経済の発展に従って21世紀の教育の重点施策は、職業教育の充実である。地元と国家の発展のために貢献できる人材の育成が課題である。大学では教育水準の維持向上が課題である。

大学の科学技術等の社会への還元も重要である。また、就学前教育の充実も重視されている。

（補足）学力トップの要因として、2002年から基礎教育の改革ということで、政府教育部が素質教育を提唱し教育内容の改革を推進してきている。新しい理念、考え方で学力向上を図っている。国家、地方、学校レベルの3段階がある。子どもたちの総合的能力の発展を図ることを目指している。子どもたちは学校で共に学んで能力を伸ばし、学校での教育を家庭教育と連携して推進する。入試の点数は大事であるが、点数だけを求めてはいけない。素質教育の考え方である。いい性格、いい価値観を身に付けさせることである。学校でもそのことが浸透し､本からだけでなく実際の行動、体験から学ぶようになってきている。つまり、素質教育はカリキュラムの改革で、実践の能力を発展させることをねらいに、学校が学習時間を減らして子どもたちが自分の興味関心のあることを学べるようにしている。勉強は辛いという思いを子どもたちにもたせたくない。**（小笠原晃）**

【参加者の感想】

三好章文……新しい理念や考え方で教育改革が進んでいることが理解できた。その中で点数だけでなく，いい性格，いい習慣を身につけさせることが大切であると話されたことが印象的であった。

中国は素質教育に力を入れ，地元と国家の発展のため貢献できる人材育成を目指した職業教育，家庭教育の充実も図りながら，生徒の興味・関心が持てる教育にシフトしているようであり，学習時間を減らし生徒のストレスを減らそうとしている様子がうかがえる。

湖南省教育庁にて、陳湘生氏（奥、左から３人目）を囲んでの意見交換会。

しかし，現実は学歴社会で保護者も学力を高める要求が強いようであり，中国もいろいろ課題を抱えていることを感じた。教育部でも特に強調していた，平等教育と教員の質の向上についても，湖南省でも同様に力を入れており，行政が予算的にもてこ入れをして中心的な政策として取り組んでいることがわかった。

小笠原晃……まさしくひとつの国といってよい湖南省の行政府である。教育に自負があり、職業人として育成やさまざまな大学のあり方が示されていたように思う。ここでも都市と農村部の教育格差は課題であり、教員に農村部での勤務を昇進条件にしたり、農村部に勤める教員の給料に手当を設定したりする取組がみられた。

柴田真弓……大きな課題として、都市部と農村部の格差是正がある。学校教育と家庭教育を結んで地域力を上げていき、人材育成を図ろうとしている。また、教育の質を高めるための教員の研修体制や農村部への教員派遣制度等、格差是正のための施策への努力が感じられた。

湖南省は、全国 11 番目の国土と GDP 全国 10 番目にランクされている省としての風格が醸し出されるとともに、課題に対して果敢にチャレンジしていく底力を感じた。

寺尾俊二……質疑では、OECD の学力調査について、平等教育の推進など教育改革を推進し、教育の質の向上を目指していること、農村部の就学率の向上、職業教育の充実、補足として、素質教育を教育部が提唱し、新しい理念、考え方で学力向上を図っていることの説明があった。湖南省でも、学習時間を減らして子どもが自分の興味関心のあることを学べるようにしているということが印象に残った。

植村訓子……湖南放送局は中国でも人気があり，日々テレビ画面で登場している芸能人が，市民の娯楽の場所「劇場」に足を運べば直に見られるということだ。私見であるが，各訪問校で見た子どもたちの質の高いパフォーマンスはここから生まれ，あこがれと夢を抱かせ，職業の選択肢となっているのではないかと思われる。

吉田克義……重点的に進めているのは職業教育で、職業の基礎的な能力の向上を目指し、多くのモデル校を指定して、官民総力を挙げて推進しているそうです。また、国民の高等教育に向けて、新しい大学や学部の設置を進め、重点的な分野を決めて研究を推進し、大学での研究の成果を社会や産業に役立てようとしていると聞きました。また、湖南省の多くの学校は、海外の教育機関と交流しており、毎年、多くの外国人教師を招へいしたり、海外の大学や学校に孔子学院（教室）を設置したりするなど積極的に国際交流を進めており、今後も日本との交流を進めたいと話していました。

3. 学校訪問

北京第一実験小学校［北京市］
長沙市特殊教育学校［長沙市］
長沙外国語学校［長沙市］
長沙同升湖国際実験学校［長沙市］
上海甘泉外国語学校［上海市］

北京と上海で１校ずつ、長沙では３校の学校を訪問した。中でも長沙では障害者教育の場を見聞し、日本語教育に従事している教員との交流も活発に行われた。

北京第一実験小学校　5月30日

児童数940名
1912年開校。来年100周年迎える。
北京第一小学校への改名は1955年10月。
《特色》以前は北京の師範学校の附属であり、教師を育てるとともに、教育実践の試験的な場でもあった。現在も世界中の養育理念を受け、小学校の改革を担っている。過去に著名な教師を多数輩出しており、その精神や人柄は、現在まで多くの影響を与えている。国際交流も重視している。文化的活動も盛んで、合唱コンクール等も行われている。

北京到着の翌日、午後、ホテルから16分で到着する。玄関口には池に設けられた水上ステージにピアノが置かれてあった。毎朝、児童がピアノ演奏をする中、登校するためである。一年生の教室を訪ねる。書画カメラが設置されているがどの教室にも備えられているのだそうだ。机の数は34脚。

廊下には特級教師の写真が掲示されていた。校庭に出ると体育の授業が行われていた。校庭の反対側にかなり広い野菜畑があった。子供たちが労働するためではなく、教育の一環として、植物の観察をかねている。ホールへ向かった。合唱コンクールに向けて4年生が練習をしている。ピアノ伴奏は児童自らで、手の振り付けを交えて豊かに歌っていた。　再び校庭に出ると陸上競技のクラウチングで器具を使用してスタート練習を行っていた。肥満な子もいる。

ジム施設へ向かう。卓球20台が備えられ週1回の授業とクラブ活動で使用する。体操室では新体操を教えている。魚が泳ぐかなり大きな水槽、魚標本、廊下に浄水器、40度のお湯が出る理科室。本は少ない図書室。英語の本はリーディング室に並んでいる。電子ブックはヒアリング室に設けられている。壁面には軍隊パレードの写真が展示されていた。音楽室の隣ではCDを作成できる部屋もあった。2年生の教室前にクラス目標(☆が貼ってある)2位数の繰り下がり(引き算)の紙が張り出してあった。トイレは和式で古い。中国では子どもを小さな時から寮に入れ通わせる子供の宿舎がある。ここでは現在170人の子どもたちが生活している。

校長からの話では生活の中の教育を重視し、放課後活動、多大な文化活動(親子の日、教師の日、クラスの日)を行事に取り入れている。国際交流は東京の王子小学校と絵等を交換し、展示している。精神のある生活、心語広場、廊下の絵はすべて一流の芸術品、ピアノはすべてグランドピアノ、400席の音楽ホールでは毎月、映画を上映している。農業体験は労働行為ではなく、植物、動物を認識し、楽しさを教えるものとして育てている。ものと理念を合わせ生活させる教育は、愛と理念と人と魂を称え、向上、真実を教えるとのメッセージをいただいた。

その他、意見交換会では、外国語教育、ITCの効果、教員の質の向上、環境教育などの話題が出た。
（鈴木明彦）

【参加者の感想】
土方美和子……中国のトップレベルの教育に目を見張った。競争が正当化され、できる子供が評価される場が当たり前のようにあったことに驚いた。（赤いスカーフ）学習面だけでなく文化的活動、環境教育にも取り組んでいて、それを支える教師の質の向上のための研修にも力を入れていることが理解できた。施設設備の充実も想像以上であった。
松嶋真美子……森や海洋をテーマにした自然教室などでは教育機器等の学習環境が素晴らしく、日本の教育予算では到底実現できそうにない施設設備が整っている。教職員も児童も「国を愛し、努力し、学校を愛し、児童を愛する」精神が行き届いている。校長が人事を

はじめ学校運営の権限を持っている点が日本と違う点である。教師の質の確保のために積極的に研修を行わせていること、日本の校内研修と同様の取組（教師派遣・講師を呼ぶ・内部交流で授業を参観する）が存在し、教職員の質の向上が子供たちの学力向上につながるという教育部の方針との一貫性を感じとれた。自然体の授業をもっと見せてほしかった。

三好章文……教室も森や海をモチーフにした自然教室，中国の伝統的な雰囲気を感じさせる書道教室など生徒の興味を引くような教育環境の工夫がなされていた。合唱コンクールなどの練習風景や数人の生徒の活動はみることができたが授業の見学ができなかったのが残念である。

「児童に最高の教育を捧げる」という教育方針のもと廊下には購入した芸術品を掲示し，北京唯一の 400 名規模の本格的な音楽ホールでの演奏会など本物を体験させる教育がなされていることに感心した。また，学力向上のためには教師の質を上げることが第 1 であり，学習に対する態度の育成や習慣をつけることも重要であると説明されたことが印象的であった。徳育教育にも力を入れており，両親にも社会にも恩返しし，恥を知り，努力することを教えると言われたことは日本の教育でも大切にしなくてはいけないことだと感じた。

柴田眞弓……北京の国立小学校で先進的な教育を行っている。教育方針として、愛と理念と魂、そして真実を教える事の大切さを感じる。

学習環境に力を入れ、「心語広場」では、一番きれいな音楽を選ばれた子どもが水上のグランドピアノで演奏し、子ども達の登校を出迎える。美しい声は音楽ホールで披露でき、芸術作品が廊下に展示されている。「育育菜園」では、すべての物を慈しむために、植物の栽培学習をさせている。

また、「徳育」は子ども達に培わせる重要な教育の一つで、子ども達は常に両親と教師を敬う態度を身に付けていく。方針として、①真実を伝える　②恩返し　③恥を知る　④努力して成長する　等が挙げられた。

学力向上の方策としては、教師の質を上げる事や勉強への構えとして学習が好きな児童を育成する事としている。学習時間外では、教師が交流し、強い心と困難を恐れない児童を育てている。教師の質の向上として、校内研修、研修派遣、北京市の研修、教師間の連携等を行っている。

吉田克義……中国での最初の学校訪問でこの学校を訪れ、社会主義国家の学校という堅く暗い私のイメージは払拭されました。玄関近くの水上のステージに置かれたグランドピアノ。コンサート会場なみの音響・照明設備をもつホール。陸上競技場と同じタータンのグランド。ボール出しマシンのある卓球専用の地下体育館。海辺の自然や生き物をイメージして作られた理科室など、どの施設を見ても、工夫を凝らしたデザインであり、この学校の教育方針「児童に最高の教育を捧げる。」に恥じない素晴らしい施設でした。また、この学校から多くの著名な教育者が輩出され、数々の賞を受賞しており、さすが首都北京の第一実験小学校というだけのことはあると思いました。

質疑応答で「宿題は 1 日 1 時間以内で、1・2 年生はなし。」と聞きましたが、小学校 2 年生の児童が 4 時過ぎまで先生の指示に従い、熱心に授業を受けているのは、たいへん立派だと思いました。

上・北京第一実験小学校の校門。
中・クラウチングスタートの練習をする児童。
下・児童による歓迎の挨拶。

長沙市特殊教育学校 6月1日

生徒数514名
教職員数128名
1908年設立
《特色》国内で最も歴史のある特殊教育著名校４校のうちの１校である。「障害者を育てて人材となす」ことを使命とし、特殊教育事業の飛躍を促進してきた。21世紀に入り、すでに盲・聾・知的障害の障害者教育を行なうまでに発展し、九年義務教育・中等職業技術教育など、総合的な特殊教育学校となっている。

子供たちのパフォーマンスの見学をするため体育館に案内された。体育館に入ると全校生徒、保護者、先生方から歓迎の拍手を受けた。子供たちの横に私たち参加者の席が用意され着席した。パフォーマンスのまえに、男女３人が挨拶をしたが、たぶんこれから始まるパフォーマンスの紹介をしたのだろう。

13人の女子によるダンス。聴覚障害児による創作ダンス。とても表情豊かで表現力がすばらしかった。男子１人による独唱。ゴミ問題をテーマにした劇。女子のダンス。視覚障害児による「足の裏マッサージ」についての面白い話には、子供たちも笑っていた。子どもの演技力もすばらしかった。女子１人によるダンス。猫の衣装を着てのダンスパフォーマンスが演じられた。

次は校舎の見学である。聴覚障害者、知的障害者や就学前の児童たちのトレーニングルームでは、社会に出て行くための教育、自分の自習、家族の教育、学校での教育で、能力を向上させている。保護者に対しても、週１回授業を設けている。小学校３年生以下の児童にマンツーマンで１人40分の授業を行なっている。実際社会で活動できる技術を身につけるための専門的な技術教室も備わっている。

宿舎は学年クラスと障害度によって部屋分けしている。廊下にはがんばり表が貼ってあり、どの部屋が掃除がよくできるか競っている。費用は１学期80元である。

火災などの際の対応を学ぶ消防教育の部屋もあり、実際に煙も出てきて、逃げる手順を学ぶ消防体験室なども設けられているのは、この学校の特色であろう。この学校の教員は、高度な指導力が必要とされるため、研修のプログラムが多く用意され、国内の他の都市へ派遣されるなど多忙を極めているという。また、学内でも相互の研修、専門家を招へいするなど、特殊学校の機能を高めている。

【参加者の感想】

相庭建次……盲聾唖に限定されていて、日本では心的障害も多く入学させているのとの違いを感じた。

福田洋一……愛情のある熱心な指導の姿を感じ取ることができた。特に芸術教育、職業教育、消防教育、徳育を通して児童・生徒の個性を伸ばす取組みには学ぶ点が多かった。

橋本正明……子どもたちの発表はどれも素晴らしく、私たちの心に訴えるものがあり感動した。また子どもたちはとても人なつっこく、握手を求めてきたり、笑顔で写真に収まったりし、和やかに交流できた。ミシンを使って服を製作している様子を見学したが、将来、自分が生きていくための力をつけることは特別支援教育の中でも大切なことだと感じた。

速水政明……中国の人口を考えるとあまりにも特殊学校の数が少なく不思議であった。内容は大規模校の特殊学級であった。

鎌塚房夫……体育館での歓迎に感激する。子ども達が懸命に演技する様子に涙がとまらなかった。帰りにお土産まで渡されたので、学校やお土産を作ってくれた子にメールでお礼を伝えようと思う。（日本語なので通じないと思うが）

三橋康孝……子供たちの素晴らしい演技と笑顔に感激。その後、施設見学と説明を受けた。全生徒が寮生活を送っている。８人部屋で、多少窮屈という気はした。子供たちは規律正しい生活を送りながら、質の高い教育を受けているのだろう。消防教育に力を入れているのがこの学校の特質。特殊教育のモデル校の観あり。ノーマライゼイションについては、まだ認識が行き渡っていない印象があった。

高橋龍雅……訪れた日の６月１日は，子どもの日ということで，児童生徒による芸術発表会を保護者や地域住民等と一緒に参観した。とても障害を抱えているとは思えないほどの完成度の高い演技で感動した。発表していた生徒だけではなく，鑑賞していた生徒の様子や車椅子の子がいなかったことから，日本の支援学校の形態との違いを感じた。

身体的な特性を生かした芸術指導や工場の人を講師に迎えた職業訓練など，「障害者を育てて人材と成す」という教育理念が地域社会にも根付いていることは，日本でも大いに参考となるものがあった。

上・子供たちが華麗なパフォーマンスを見せてくれた。
下左・長沙市特殊教育学校の玄関では歓迎のサインが迎えてくれた。
下右・被服の授業を視察した後、交流をした。

植村訓子……歓迎式を兼ねてステージ上でくり広げられた生徒たちのパフォーマンスは多様でその質の高さに驚いた。そして、何よりも、舞台袖で指導をする教師の姿が情熱的で、子どもたちの持つ障害をすべてかき消すほどの完成度で，観客席の子どもたちを含めて三者が一体化していた。耳を頼りにコントや音楽に聞き入る子どもたち，一心に眼をこらし，踊りや劇に視線を送る子どもたち，さらには，集中力を欠きながらも新しい出し物に身を乗り出し楽しむ子どもたち・・・その生き生きと笑い，楽しんでいる表情の中にも長時間横にいるとさみしさが見え，何とも言い難い感情と涙が出てきた。

長沙外国語学校　6月1日

校長　燕玲春
中高生 2,300 人
教員 180 人
《特徴》長沙市教育局管轄の公立学校。前身は 1963 年長沙市第 23 中学。1996 年改名。長沙市は鹿児島市と姉妹都市となって 26 年になり、これまで様々な交流を行なっている。最近では、日本語教育に力を入れている。

校長から学校紹介があり、参加者との間で質疑応答が交わされた。

全校 43 クラス、教員 180 名で外国語教育に重点を置いているのが特色。英語、日本語、韓国語、仏語など最近は日本語への関心が高い。

質疑応答のうち「教科書等での日本の取り扱い」では地理･歴史の中で、世界の一部として紹介されている程度で特別に取り上げられていない。しかし生徒は、日本の芸能人やアニメキャラクター等に興味･関心が高く、日本の文化的情報に詳しい様子。
「外国語教育」は言葉の学習を通して、総合的な学力向上を目指している。3～6年で英・日をマスターするカリキュラムを検討している。
「学力向上対策」で授業時間8:00～17:00だが、休み時間も勉強している生徒多い。科によって宿題が出されている。両親から厳しく質の高い教育を要望されている。読書も重要である。外国語指導では、会話重視で聴く力を高めている。中学卒業後は、大学進学を目指す普通高校か、職業技術を学ぶ高校かを選択する。中学でも職業訓練的な課目を検討中。軍隊や農村部等への体験的活動もある。学力の低い生徒に対しては、教師や学力の高い生徒が教える等、個別に対応している。
「不登校について」は義務教育期間内では、不登校生徒はいない。親に連絡し､必ず学校に連れてこさせる。高校の場合、転校させることもあるが、数は少ない。
「入試制度」は中学から高校、高校から大学に進学するとき、9科目の統一試験がある。本校高等部へは卒業試験と希望によって選別。大学進学率は中の上くらい。学生の個性に合わせた大学をすすめている。
面接試験の実施により外国語能力を試す方法が採られている。

外国語指導の割合においては、中学校では、英語･日本語共、第1外国語として同じ時数を学ぶ。高校では、2クラスが日本語専攻のクラス。英・韓・仏の指導状況には言及されなかった。

英語検定のPETSにおけるレベルは8段階。生徒が各自申し込み受検する。

質疑応答の後、3クラスに分かれて日本語の授業参観をした。教師は中国人日本語教師2名、日本語教師1名(鹿児島市出身)であった。2クラスがパソコンを使っての買い物時の会話練習。1クラスは卒業シーズンということで、「ありがとう、さようなら」の歌を指導していた。特に教科書は使っておらず、学習プリントを用いて、一斉指導、ペア学習を取り入れていた。生徒は明朗快活、表情豊かで、大変意欲的な姿勢で授業に臨んでいた。話しかけると皆笑顔で応えてくれた。制服は半袖と長袖のジャージがあり、教室での授業も体育も同じ服装で受けていた。学用品は日本と変わらない。生徒の評価については、普段の宿題提出や、試験の結果で行なう。通信票は日本と同じようなものはないとのことであった。**(高橋龍雅)**

【参加者の感想】

松嶋真美子……中学校では、英語・日本語共に第一外国語として同じ時数学ぶ事を知った。日本語授業を授業参観させていただいた事が収穫である。同じ学年の3クラスが同時に日本語授業だったが、教師が流暢な発音で日本のデパートでの買い物の仕方をワークシートの活字、板書、パソコンで、繰り返しキーワードを教え込む。その後体験的に4名1組で実際にデパートの店員と買い物客のやりとりを練習する場面があり、日本と同じ手法だと感じた。特に教科書はなく学習プリントを用いて、ペア学習・一斉指導を行っていた。制服がなく、授業も体育も同じ格好であること、洋風の素敵な設備とは不似合いのドア無しトイレには、どの学校に行っても習慣の違いを感じた。生徒と個人的に話ができたが、「日本語を勉強して東京の大学に行きたい。そして中国に帰り国家のために公務員になって働き家族を養いたい。」「日本の浜崎あゆみが好き。知っているか。」など、具体的な夢などを聞くことが出来た。帰って日本の中学生との「志」の比較をしてみたい。

三橋康孝……2300人の生徒を抱える日本語教育に力を入れている中高一貫校。感動したのは、1人の日本女性が日本語教師として派遣されており、その授業を見学できたこと。恐らく苦労も多かったろうが、こうした人達が友好の礎を作っているのだと実感した。

丹羽美由紀……中高一貫校といいながらも、高校進学時には、普通高校から大学への進学か、職業高校に進むのか選択があった。ある意味で選別が行われていたようにも感じた。外国語指導において、コミュニケーション能力が重視されている点は、日本の現状と通じるものがあった。不登校等については、保護者の責任であることが､日本よりも明確であったように思う。

柴田眞弓……外国語を特色とした2千人を超す生徒に対し、特級・高級職員・外国語専門教員等、教職員の層が厚く最高レベルの教育を行っている。特に日本語に力を入れており､1クラス40人を超す教室で､質･量ともに突出した学習内容を行っている。

日本人教師による「日本語」の授業において、日常生活に即した会話重視の学習がなされており、初めて聞く日本の歌をすぐに歌う力が身についている。日本の英語学習が、日常英会話の即戦力につながりにくい事と比べ、中国教育の方策と生徒の意欲的な学び取り

上左・長沙外国語学校にて校長を囲み意見交換会。　上右・グランドと校舎。
下・日本語の授業に参加した教室風景。

の秘策を理解するには、まだまだ多角的な見方をしていく必要があると感じた。

植村訓子……三つのグループに分かれ日本語の授業参観。中国人教師２名と日本人教師１名(鹿児島出身)によるものだった。生徒たちは非常に明るく、２人の生徒と会話の練習を行ったが、積極的に取り組み，日本語の会話文をなかなか上手に読みこなした。授業中もうけられた質問タイムで生徒たちに「トトロを知っているか」とたずねると、「知っている」という答えが返り､逆に「ドラえもんを好きか」とたずねられた。日本のアニメが中国の子どもたちにも浸透していることを伺わせる一例である。

吉田克義……鹿児島出身の日本人教師が帰国前の最後の授業を行っていました。中学校２年生の日本語の授業で、教室には 53 人の生徒がおり、教師主導の一斉授業を行っていました。日本語の会話文の音読練習をしていて、たいへん上手でした。そのあと役割を決めて行った会話練習に私も参加しよい思い出となりました。まだ授業で教えていない日本語の単語の意味を知っている生徒がいて、熱心に家庭学習に取り組んでいることがよくわかりました。隣のクラスでは、中国人の先生が、日本語のビデオを見せながら、買い物についての会話文の指導を行っていました。放課後、生徒たちから話を聞くと、日本の芸能人やアニメキャラクターなどに興味をもっていることがわかりました。

長沙同升湖国際実験学校　6月2日

校長　孫培文
児童数 3000 余名
2000 年創立
《特色》中国・オーストラリア合併企業により設立された全日制寄宿学校である。広大な敷地の中に建設された各棟、各館、各寮等は先進的かつ合理的に配置されている。
学校施設が充実し、みどりも多く景観良好。国際性、開放性、自主性を特長とする。
外国の姉妹校が多数ある。(オーストラリア・アメリカ・イギリス・シンガポール等)

幼稚園舎で歓迎会が開かれ、小学生から高校生による芸能が演じられた。現代舞踊から、少数民族の歌舞、コーラス、伝統的な器楽による演奏などが披露された。校内の施設を巡る。階段の壁面には生徒の作品が展示されてあった。ある教室ではカンフーの練習、また 3000 余名を収容できる体育館ではバンブーダンスのような授業が行われていた。今日のために通常授業に振り替えてのカリキュラムとなったとのことだ。ホールを利用した書道の授業も公開された。また他の教室では１人１台のパソコンを使っての授業も行われていた。途中、各階段に２名の児童が立っての歓迎（”Welcome to our school” と声をかけられる)。授業を受けないで大丈夫かとの質問に対し、自習時間にしているので大丈夫と教師の返答があった。自習時間の教室も訪れた。どの児童も姿勢がよく、カメラや廊下での見学者の声にも反応せず、集中して黙々と本に向かっていた。教室の環境は良好であった。

International Exchange Center という施設があったが、国際部校長によると、ここは漢文化を紹介する図書館で、他文化を理解させるとともに中国（語）を全世界に紹介、発信する場所ということであった。

視察を終えると校長から学校紹介と現状報告を受けた。それによるとこの学校は教職員数 500 名（提供資料では 640 名）で、5 部門（幼稚園・小学部・中学部・高校部・国際部）から成る。

生徒は各地域からやって来ている。2010 年 8 月 5 日、企業として株式市場に入ったことを強調していた。一つの授業は教師で、他の program は生徒が作る。活動能力、文化的能力が高く、2008 年北京オリンピックに現場記者として本校出身者 5 名程活躍の実績を残している。Internet で HP を閲覧できる。パソコン教室にてアメリカの小学校と交流。現在 4 名が米国に留学している。

2006 年から 2010 年の 4 年間、本校教師・生徒を日本に留学派遣した。（その折の感想：リサイクルと環境教育が勉強になった。日本人の礼儀正しさに感銘したという。海底トンネルに驚く。今後日本に教室を設立したい希望があるそうだ。)

有名大学の合格者も数百名に達する。学校に関する本を出版。教科書問題集も作成中とのことだ。

最後に質疑応答に入る。学力を高めるものとしての質問に対して、現在北京師範大学心理学教授と、学習能力訓練の課題について研究を行なっている。記憶力、集中力、さらに受験のスキルを高める＝大学入学必勝法に関するものである。自信が基盤となり、興味が最良の教師となる。

また学校・企業経営については、共にルールを守ることが大事である。学校は教育を、企業は利益を、このバランス感覚を取ることが一番重要である。学生の授業料は利益。湖南省で最も高額の２万６千元（国際部は８万元)/ 年、収益金は１億元 / 年となっている。

子供たちの１日の生活について、朝のジョギング（1 時間。丈夫な体が大事。心理的健康。生活習慣）・朝食後は読書の時間を設定している。寄宿舎では中学生は 21:00 ～ 22:00 には就寝する。外出、ゲーム、携帯、テレビは禁止されている。親との連絡は公衆電話を使用している。

最後に感想を少し述べてみたい。各所に掲示された品々のアイディアと色彩・配置に目を奪われた。経済力に支えられた諸施設と学校環境のすばらしさがうらやましい。まず初めに視察させた幼稚園学舎では、3、4 歳児の英語力を見せるパフォーマンス戦略のようにも思えた。数校を巡り、まずは「自信」を持たせることが学力向上へのキーワードと実感させられた。
（植村訓子）

【参加者の感想】
相庭建次……民間の企業が建てた学校ということで、高校の進んだ教育法を見たかったのであるが、見せてもらえたのは幼稚園の授業と、小学校の授業だけでした。生徒達の迎えるマナーはさすがという感じでした。小学校 4 年生のパソコンを使った美術事業でのピカソの色彩バランスについてはとても日本ではできないと思われました。

上左・長沙同升湖国際実験学校の校舎。　上右・歓迎会。
下左・体育の授業。　下右・意見交換会

福田洋一……企業の投資により設立された国際学校であり、国際交流などが盛んに行われている。校長の経営が民間企業的な色彩も強く教育における学校経営の視点として大変参考になった。

橋本正明……企業によって設立された学校ということで、教育の質的向上と企業利益についてのバランスはどうなっているのか興味深かったが、学校は教育、企業は利益とはっきり答えられた。日本でいわれている企業のマネージメントを学校経営に活かすという考え方とは少し違いが感じられた。

速水政明……私立学校だけに規模も大きく生徒も多い。中国の経済発展が続けば、私立校がさらに増えていくであろう状況を見た。

松嶋真美子……企業が運営する学校で、学校に一人でも多く児童生徒を集めることがビジネスである。家庭教育について質問しても、「親は一生懸命働いて質の高い教育を受けさせることが務め。」という他と同様の回答しかこない。むしろ家庭教育については踏み込んだ質問をしにくい雰囲気を感じた。一人っ子政策以降、早い年齢から親元を離れ、本当に愛情や家族愛はまともに培われていくのだろうか。経済大国になっても、それを動かす人々はどんな人格に育つのか。

鈴木明彦……成功した企業家というイメージがつきまとってしまった校長。広大な土地に幼稚園から高校まで全て取りそろえ、豊かなる収益を上げる努力をしていると感じてしまった。選りすぐれた子どもたちの歓迎会は素敵だったが、校長の話の後、何かあると利益のために駆り出されるのかなと暗い気持ちになった。

吉田克義……各教室には、パソコン、大画面テレビ、プロジェクターなどの最新の視聴覚設備が設置され、特別教室、体育館等、どれをとっても日本の学校以上の充実した施設・設備でした。敷地内に五つ星のホテルがあり、住宅建設も行うなど，学校を中心とした都市作りを行っていることにも驚きました。同校では、生徒のやる気や自主性、創意工夫を重視し、素質教育に力を入れ、生徒の個性を尊重し、才能を伸ばす教育を行っていると聞きました。その一端として、私たちを歓迎し、生徒たちが歌や踊り、胡弓の演奏などを披露してくれましたが、どれも素晴らしい内容でした。

参観した美術の授業では、インターネットを使いアメリカの学校と結んで、ピカソのゲルニカについて学習していました。質疑応答では校長先生から学校経営と企業としてのマネージメントなどについて興味深いお話を聞くことができ、たいへん参考になりました。

上海甘泉外国語中学 6月4日

校長　劉國華
児童数1000人余り
1954年設立
《特色》公立中学（中高）で、上海市唯一の日本語を第一外国語とする中学高校。2003年に外国生徒部を設立し、日本･韓国・ドイツ・アメリカ・フィンランド等からの生徒を受け入れている。

翌日帰国の予定で、最後の学校訪問となった。校内見学から視察が始まった。1階には写真が展示されたホールと演芸ホールが占め、地階へ降りると舞踊室が設けられていて､他校も使用することができるという。2階は留学生の勉強ルームとHSKの部屋(中国語検定試験でレベルを測る、小部屋で1対1で対応できる)、3階は教室、4階は200人以上収容できるホールで訪問団の歓迎に使用された。教師休憩室(エアロビクス等の賞状)、小ホールなどが備えられていているが、その一部には日本企業からの寄付、日本文化を研究する場ともなっている茶室も作られていた。中国を読み取る施設で、床に歴史が刻まれている孔子像四大文明の説明･絵巻等が展示されている文化体験館が入っていた。

視察を終えた後は王副校長、校長の挨拶がありビデオを利用しながら学校の紹介と日本との深い関係が述べられた。ビデオ1では10年の記録が集録されており、久留米から送られた桜がきっかけで、3月に桜祭りが行われることになった。2000～2003年には日本語教育が導入され、日本語カラオケ大会等行なわれ、アメリカ、イギリスも参加した。2004から2007年には海外から留学を募り受け入れを開始した。

ビデオ2では教育新聞のTV番組で甘泉が取材を受け、日本文化、中国文化等を生徒が学んでいる様子や外国からの生徒や教師が中国語を学ぶ様子などが放映された。

ビデオ3には、日本のフジTV番組を収録したもので、中国と日本の教育事情の違いを紹介していた。たとえば中学1年の必修科目は中国では13科目、日本9科目､上海では英語は小1から必修というように。校長からは、まず今回の東日本大震災の復興に向け、生徒自ら「日本がんばれ」と作文をまとめたことが発表された。

バイリンガル教育を強調し、優秀な生徒は英語･日本語を同時に学べるとして、中国日本語スピーチ大会優勝、優秀賞を受賞した生徒2名を紹介した。7月に中国代表として、世界スピーチ大会に出場するリーさんは391点/400点で1級合格した。甘泉の留学生の中国語レベルは高く、8人は中国の大学に合格。また中国学生の中には、慶応、早稲田、東大、同志社の日本に留学する生徒もいる。

質疑応答では、語学能力が高いのはどのような教育をしているのかに関心が寄せられたが、やはり教員の研修体制と生徒の体験学習に質問が及ぶと、「よく研究授業（公開授業）を行なう。毎週水曜午後は、研究活動を行なう。授業方針は、「生徒を中心に進める」。先生は指導という立場を貫く。日本語は文法、読解だけでなく話す力、聴く力を鍛えている。その他に日本文化を知る機会も設けている。修学旅行を受け入れ交流させる。訪問団も実施し、夏休みは中国語キャンプと称して外国人学生との交流を行なう。先生の研究に役立つのは、外国人教師である(日本人3名)。中国人生徒と留学生の交流も進めている。優秀な生徒を派遣してもらい、中国語･文化を学んでほしい。中日友好に役立ち、国際的視野を広げるのに役立つだろう」との回答を得た。

バイリンガル教育の一番重要な点は「教育方針、教養、個性、国際的視野を持つこと。教養が一番大切である。個性を伸ばすために、たくさんの活動が必要と両国の交流を強調していた。**（丹羽美由紀）**

【参加者の感想】

福田洋一……外国語学習に力を置き、特に日本語を第一外国語とする中学高校であり、日本語のできる人材を育成していた。教養と共に個性伸長、国際的視野の育成などに力を入れていた。国際社会の中における優秀な人材を育てようとする校長の明確な理念を強く感じることができた。

橋本正明……東日本大震災に対して日本の学校に激励の作文を送っていただいたことに感謝の気持ちでいっぱいになった。学校の説明もパワーポイントで、しかも日本語でまとめられていた。世界各国に学校の事務所を設立していることもプレゼンテーション力の高さを見てうなずけた。

PISAの好成績については、上海全体の教育レベルとは思っていない。教育で大切なことは、将来社会の役に立てるかどうかであるという言葉が印象に残った。スピーチコンテストで優秀な成績を修めた生徒は、

上左・上海甘泉外国語中学が国際交流の取組みを展示するため設けた部屋。
上右・日本語スピーチコンテストで優勝と優秀賞を受賞した女生徒と校長（右端）。
下左・体力を鍛えるために武術が導入されている。　下右・日本の文化を理解するため和室も設けられている。

気負うこともなく私たちの質問に答えてくれた。

松本紀子……全員が日本語を学習し知日家を育てる教育がされうれしく思った。私達は、日本のことを見られているという意識を持ち、日本で恥じない教育をしていかねばと思う。また、公立でありながら校長が教育だけでなく経営者にもなっていることに驚いた。

酒井淑子……公立中学校（中高）で，単に語学を学ぶだけでなく，その国の文化も紹介されており，日本については茶室が造られ，春には桜祭りが行われるとのことであった。日本語スピーチコンテストで優勝していた女子学生が意見交換会に出席してくれた。日本人も表現できないのではないかと思われるような語句も使い，流暢な日本語で答えてくれた。学習時間に関しては平日 17 時までの授業の後，４時間の家庭学習をやっていると答えてくれた。上海の生徒の学習意欲と能力の高さを思い知った。

高橋龍雅……中国出発前，この学校の記事が新聞に載っていた。復興支援のために日本語で応援文集を作り，宮城県の高校に送ったという内容であった。その生徒が案内役として出迎えてくれたとき，直接会ってお礼がしたいと願っていたので非常に嬉しかった。彼女に，なぜたくさん勉強をしているのか，夢は何かと尋ねたところ，堂々と「将来は公務員になって国のために働きたい」と，しかも日本語での答えは衝撃的であった。

寺尾俊二……公立中学で上海市唯一の日本語を第一外国語としているのが特徴である。この日は土曜日で学校は休みで、生徒はおらず、日本語スピーチコンテストで優秀な結果を出した２人の女子生徒が施設見学に同行した。流暢な日本語には驚いた。外には、日本の企業から寄付された茶室があり、日本文化を取り入れていこうとしていることが伝わってきた。その後、桜祭りの様子、中国テレビ、日本のフジテレビのビデオを見た。校長の学校概要説明でも桜祭りでの日本語スピーチコンテストやカラオケ大会、外国の留学生による中国語コンテスト等、ダンスコンテストなど、全校生徒で取り組んでいる様子がわかった。こういう体験学習を重視していることがわかった。

4. 歴史と文化訪問

岳麗書院［長沙市］5月31日
湖南省博物館［長沙市］6月2日
湘繡研究所［長沙市］6月2日

岳麗書院［長沙市］5月31日

《特色》書院とは中国の唐代に、古文書を収集して学士に研究させた施設で、宋代には政府の奨励によって書院が造成され、岳麗書院はその当時に残る４大書院のひとつで最古である。976年に創建され、1926年から湖南大学となる。残る３書院とは、河南省崇陽書院、江西省白麗堂書院、湖南省石鼓山書院である。元代になると科挙を目的とした予備校化していった。

中国の建物は中軸線を中心に建てられているが、岳麗書院は宋時代に火災を受け再建されたが、その際中軸線がずれた。

正門には「惟楚有材」「於斯為威」の門票が貼られているが、それぞれ人材育成、栄えることを示す。「名山壇席」の扁額は名山の基に教室があり、人材をたくさん隠しているという意味である。また両壁には「寿」「福」の文字が書かれて、天井に描かれたコウモリの絵も共に幸せがいっぱいの意をなしている。

学生が学ぶ教室は、青空のもと敷石の上であった。壇上には二つの椅子が置かれているが、昔日はそこに先生が座り議論をし生徒にそれを聞かせたといわれている。

壇上中央に架けてある扁額「是求事實」は、真実を求めるという意で、湖南大学出身の毛沢東が理念としたものである。

壁面には四つの文字が書かれてあった。忠誠心の「忠」、賄賂を受け取らない「廉」、親孝行の「孝」、人としての礼儀である「節」である。

この書院にも孔子廟が建っている。科挙を受ける学生はここを参拝して受講したそうだ。現在も受験期になると合格祈願に来る受験生が多い。

御書楼という図書館も999年に建立された。屋根の両脇に尾を刺された龍が鎮座している。当時火事が多かったので、龍にこの建物を火から守って欲しいとの願いからである。学長住居の裏に岳麗山（298メートル）が聳えているが、学長がよく散策で登っていたそうである。

訪れたときは大学の卒業シーズンのため学帽、ガウン姿の学生が見られ、若々しさを感じると共に、歴史の重みを実感した。**（酒井淑子）**

《参加者の感想》

橋本正明……岳麓書院の入り口に書かれてあった「唯楚有材・於斯為威」の文字が目にとまった。いつの時代にあっても「人を育てること」が重要であり、国の発展の礎となることは間違いのないことである。教育者としての使命の重さを実感した。それにしても孔子像は迫力があった。

三好章文……毛沢東の巨大な像をみながら1000年以上前の中国４大書院である岳麓書院を見学し，中国の教育の歴史を感じた。

特に印象に残ったのは講義が青空教室で行われ，壇上の２名の先生が議論を聞かせていたことであり，知識だけでなく思考過程や知識の活用方法を教える効果的な教育法だと感じるとともに，この広場で学問への情熱を持った生徒が集っていたことに思いをはせると感慨深いものがあった。

小笠原晃……湖南省及び長沙市について、視察前は知識もなく関心も少なかったが、改めて地図を探ると、「岳陽楼に登る」など、漢詩の世界でたびたび登場する洞庭湖の南に位置する省ゆえの命名であること、杜甫の墓があること、屈原の汨羅、孔子と利発な子どもとの逸話がある岳陽のまち、何よりも毛沢東の出身地であることなどがわかり、大変興味をもって視察させていただいた。また、屈原を助けようとした住民が我先に船を出した故事が、現在の６月５日の端午の節句のドラゴンボートレースになっていることを初めて知った。

夕食をとった「火宮殿」の、毛沢東のおいしいという言葉が壁に記されているために革命時に取り壊されなかった逸話は、料理の味とともに心に残っている。

湖南省博物館［長沙市］6月2日

《特色》省内最大の総合的な博物館

中国漢初期の長沙の国の宰相の墓「馬王堆漢墓陳列」を見学。
一号墓：今から2100年余り前の宰相の妻の遺体が出土。保存が完全である理由には、地下深く掘ってあることと、五つの土の層になっていること、4重の棺で覆われていることによる。
二号墓：宰相の墓で、彩色土偶、陶器等が出土。
三号墓：利蒼の子(息子)の墓で、布製や竹の本等が出土。

これらの墓は、長沙の国の王の権力の現れでもあり、死後、天国に飛んで行きたいという願いが「飛衣」の絵からも理解できる。その他、食料品や古銭、絹の衣や多くの出土品から、当時の栄華が感じられると共に、2000年の月日を経ても、なお息づく漢のエネルギーと歴史の重みを感じさせる。

湘繍研究所［長沙市］6月2日

《特色》中国四大湘繍の一つ

中華民族の伝統的な湘繍で、2000年の歴史を持つ。1854年李儀徽から始まる。
題材として、動物・植物・人物があり、水墨画の風景や文字でも、湘繍で繊細に表現されている。両面湘繍に至っては、芸術作品としてのプロの技である。

工場では、3年間訓練を受けてプロになった職人が、大作になると数人で1年間かけて完成させる作品にも取り組んでいた。

昔、シルクロードで重要な商品として交易された、湘繍の伝統の技である。**(柴田眞弓)**

《参加者の感想》

小笠原晃……湖南省博物館＝湖南省最大の総合的な歴史芸術博物館であるが、馬王堆墓坑遺跡、馬王堆漢墓、湖南古代墓の復元陳列、わずか48グラムの絹の服、彩色模様の絹と綿の長衣、湖南省伝統工芸である刺繍家の墓から出土した宰相の妻の遺体である。約2100年前のミイラは、保存が完全で一部の関節が動き、皮膚には弾力があり、死後間もない遺体と変わらなかっ相たという。絹等にくるまれ、地中深く何重もの棺に納められたためといわれる。生前に作られた墓は30年ほどかけて作られたものと思われ、遺体は50歳代での死亡と推定されるので、結婚した頃から墓を作り始めたものと考えられている。

左・岳麗書院の孔子廟

調査から鬘を使っていたことや罹って板病気などもわかっているそうで、胃からは瓜の種も発見されているそうである。実際のミイラも展示されていた。知らざる中国のひとつであった。

彩色土偶や陶器、地形図、布製の本なども出土しており、古代哲学、歴史、科学技術などの貴重な歴史文献資料になっているものであるが、棺を覆った長衣に刺繍された天上界、現世、地階の考え方は仏教の極楽浄土や地獄思想があったことの証と思った。

湘繍研究所は湖南省の伝統工芸である刺繍の国営の研究所である。工場が併設されており、特級や一級の認定を持っている刺繍師が作業をしていた。一針一針の気の遠くなるような作業によって、芸術作品となる刺繍が作られていた。最も有名な虎の屏風3枚のうち1枚は、日本の当時の中曽根首相に贈られたそうである。

作品はいずれも高価で、大きなものになると会社への贈答品等になるそうであるが、高級外車よりも高かった。

刺繍師は、基本給プラス歩合給で、作品が認められるとその分の報酬を受けられるそうである。窓際に作業台を設置し、自然光による7時間労働で、個人もしくは共同作業も行われていた。ここにも中国の知らざる一面があった。

5. 総合所見

数億の学生たち

相庭建次

初日の中華人民共和国教育部で王定華基礎教育一司副司長が話された現在の中国の教育現状が特に印象に残りました。その中で 1986 年に義務教育が整備されて、完全に無償化が図られたのが 2000 年、しかし、現在も 99.7％に近い数値にまで達してはいるが、残りの 0.3％は農村部に集中しているとのこと。小学生から中学、高校、大学を合わせると数億人の児童、生徒、学生がいることを考えれば、100％に至る困難さが伺い知れました。意外であったことは中国の学校では生徒に掃除等の働くことをさせていないということでした。北京第一実験小学校では掃除婦の人が階段や廊下を掃除している光景に出くわしましたので、労働しない現実が分かりました。教師の配置が生徒 17 人に対して 1（普通教育）、特殊教育では生徒 2 人に教師 1 を配置している中国政府の意気込みが強く感じられました。

北京第一実験小学校では、学校全体が中国教育の見本のような実験例を次々にやるという雰囲気が伝わってきました。森の教室や、卓球を教える教室（20 数台の立派な卓球台）新体操を教える大部屋、地元の一流の芸術家を招いての演奏会を頻繁に開いている事など日本の小学校ではとても考えられないものと思いました。しかし、2 年生の職員室に約 15 ～ 16 人の先生がいらっしゃったが、小学全体の職員室はないとのこと。学校全体の先生方の意思統一ができるのだろうか、という疑問が残ったのも事実です。

長沙市の特殊教育学校では、入ってまず印象としては生徒が多いなあということ。それにすべての教室に鉄格子がはめられていて、隔離しているという印象が強く残りました。王定華副司長に言う障害者の生徒 2 人に 1 人の教師は実際に聞くと 514 名の生徒に 128 名の教師と言う。2：1 は実践されているのか、という思いでした。

特色ある教育活動

福田洋一

北京、長沙、上海、いずれの都市も高層ビルが立ち並び、大きな都市が発展する様子に圧倒されました。そのような中、初日、中国教育部副司長から直接、中国の教育改革について説明いただいたことは大変興味深いものでした。

副司長からは、義務教育の無償化、平等教育、就学前教育、高校教育、障害者教育、徳育、文化教育（特色ある教育）、社会体験活動、不登校対策、受験過熱対策、インターネット教育、教員の授業力向上など中国政府による施策の重点的な取組みについて説明がありました。日本の教育施策や教育課題ととても似ているとともに、中国における教育の充実は目覚しいものがあると感じました。同時に同じような課題に直面し、対応に苦慮している姿も浮かび上がってきました。

一方で、日本の学校は均質化されており、都市部と地方の格差、学校間の格差に課題がある中国とは違いが見られること、また、日本の教育においては、組織的課題対応力の充実など、教員集団が組織的に取り組む姿に強みがあると考えていますが、今回の訪問を通して中国においてはこの点はあまり特質するものは感じませんでした。また、教職員の授業力の向上を図るための研修の実態については十分には把握できませんでしたが、逆に日本の OJT も含めた丁寧な研修は自負できるものであると強く感じることができました。

中国における校長のリーダーシップ、外国語教育をはじめとする特色ある教育活動、自らの意見をはっきりと述べようとする生徒の実態などは学ぶ点が多く、国際社会において日本がさらに重要な役割を果たし、他国と協調しながらリーダーシップを発揮していくために参考になると感じました。

教職員レベルでの交流

橋本正明

昨年10月、滋賀県近江八幡市は中国教職員招へいプログラムで、26名の先生方の受け入れをさせていただきました。お互いの国の教育や文化等について語らい、とても有意義な交流となりました。以来、中国の教育事情は私にとって大きな関心事となっています。今回、幸運にも中国を訪問する機会をいただいたことに大変感謝をしています。

学校視察では教職員や子どもたちのエネルギーと将来展望を見据えた眼差しに触れ、私が教師になった頃のことを思い出しました。今の日本に教育に対する熱い思いと大きな期待がどれほどあるのだろうと自問しました。時代の流れといえばそれまでですが、権利意識だけが強くなりすぎると弊害も大きくなるような気がします。また、中国では小学校での英語の学習時間は、1～2年生が週2時間、3年生～6年生が週3時間と聞きました。国際化の進む現代にあって、英語（語学）を身につけることは必須であり、これからの国際舞台で世界の人たちと対等につきあっていくためには日本はもっと語学教育に力を入れていかなければならないと思いました。

今回のプログラムを振り返り、今の日本の教育に必要な視点を自分なりに次の3点にまとめました。

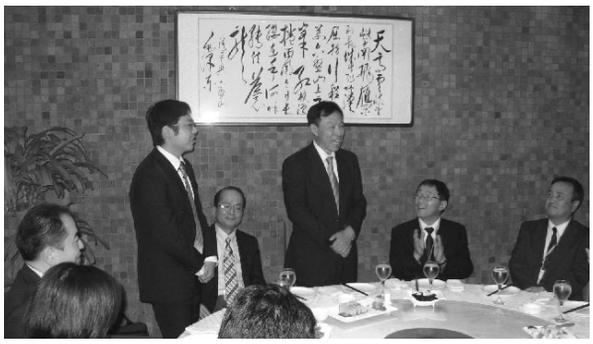
1. 児童・生徒に、何のために学ぶのかという目的観をもたせること。
2. 善の競争意識をもたせ、自分の力を最大限に発揮させること。
3. 親や教師が尊敬される、教育のための社会づくり。

今回、文部科学省、中国教育部、ACCU事務局の方々のご理解とご協力をいただき、昨年私の家にホームビジットに来られた先生のご自宅を訪問することができました。

ホテルまで車で迎えに来ていただき、夜の学校訪問の後、夕食を囲み、教育事情をお聞きすることもできました。私の娘の名前も覚えていてくださり、感激しました。こうした教職員レベルでの交流も大変意義深いと思います。

北京の教育部での意見交換会

教育部で記念品呈贈呈が行われた



教育部主催昼食会で挨拶する劉宝利国際協力交流司副司長

北京第一実験小学校での意見交換会

達成感有り
速水政明

真剣な研修に、達成感有りとみました。物見遊山なら興味が半減したでしょう。事前の研修より、中国現地での体感が充実していたため、あれもこれもと要求しがちですが、二、三の点を除けば、計画的 (行程的) にも合格点ではないかと思います。

二つの学校が印象に残りました。北京第一実験小学校は、あれ以上見せてくれないので、次回は別の学校がよいかと思います。

最終日の上海甘泉外国語中学は日本を理解してくれているので、私はもう少し別の、日本を知らない学校の方を希望します。

学力向上と徳教育
土方美和子

中国の先進教育都市北京と上海、清の歴史から今日までの間、優れた人物を排出し小中高の就学率も高い湖南省を訪問することができ、想像以上の教育のレベルの高さを実感した 8 日間だった。

学力向上は教員の質の向上：今回、生徒の学力向上に対する問いに教師の質の向上があげられた。日本でも教員の資質向上に関する研修の充実、学校現場での OJT の推進、教員の評価制度等が行われているが、どちらかというと授業改善や授業力の向上に視点をおいた研修が多い。また、授業以外での指導力（生徒指導、保護者対応、部活動、カウンセリング、校内分掌、学級経営等）も問われる。あれもこれも何でも屋を求められる日本と異なり、教師は授業をし、それを評価されその姿を子供が敬い親も家庭と学校の役割をきちんと理解し、学校に教育を任せるというスタンスはハッキリしていてわかりやすい。だからこその親からの学校に対する高い要望や教員への評価の厳しさも伝わってきた。自戒の念も込めて大変印象に残ったことばである。

徳教育：日本でも道徳教育を重視し授業が行われているが、授業の確保や中身に関しては学校・教員の力量等で格差がある。資料によると「一人っ子政策のもとで甘やかされて育ち、自立性や社会性に欠ける一人っ子の教育が新たな問題となっている」ことから、徳育の強化が図られていることに、日本でも同じような（一人っ子ではないが）問題がある。今回授業を見ることができずに残念だったが、どのような授業が行われているのか興味がある。また「徳育が先」「教師や親を敬う」「真実の追求･･･恩返し（親、教師、社会)」が社会全体のベースにあることこそが、教師や親の本来の威厳を支えているのではないかと感じた。

全体を通して：今回の訪問校はどこも学力はトップレベルの理想的な教育を実践している学校であった。指導力のある教員集団、施設設備の充実、特色ある教育課程（学習面だけではなく創造性、感性を育む教育など）を実践し成果を上げている。視察をとおして、中国の教育に対する認識も変わった。また、知育中心の教育を改め、資質（素質）教育への転換が理想図で行われており、日本でもお手本にしたいほど素晴らしい学校ばかりだった。

反面、他の一般的な学校での教育環境や課題、生徒の実態、障がいをもつ生徒への対応等の実態がわからないまま終わってしまった。中国教育部で伺った一人っ子政策による子供への弊害、心理問題（ストレス）や非行問題、また、特殊教育の中で語られなかった肢体不自由な子供に対する教育、バリアフリー等理想の教育を行っている学校では伺えなかった現状を学ぶ機会がほしかった。訪問校での説明は丁寧で自校の特色を積極的にアピールしていたが、先生方や生徒とも交流する機会がもてたらより充実したプログラムになったと思う。

考えさせられた学校として国として
鎌塚房夫

１. 視野の拡大と現場の教師の派遣：海外の教育を直に見学することができ、教育の視野が広がりました。教育の現場にいるとどうしても、児童に対する教科学習、生活指導、保護者対応、学校行事等に振り回されて目の前の対応に追われることが多いです。今回の視察は、学校として、国としてどのような教育をすれば子どもが良くなり国が発展するのかを考えるきっかけを与えてくれました。このような体験は、現場の教師こそ必要と感じました。

２. 反日感情の無さ：中国では、古くは倭寇、戦前では中国侵略や南京事件､昨年の漁船衝突事件があって、現地での反日感情を予想していましたが、視察の学校や施設だけでなく一般のお店でも反日感情が全くなくて親切に迎えられて、ほっとしました。文化交流や経済交流は政治と関係ない部分もあるのでどんどん交流するべきだと感じました。

３. 外国語教育重視：まず英語教育を重視して、会話ができるように週３時間学習していること。日本の小学校の場合は、外国語教育のねらいは「英語に慣れ親しむ」です。英語を話せるようになるや覚えるではなく、慣れ親しむことなので、英語のゲームをやって楽しい授業ですが、子ども達は英語をほとんど覚えませんし話せるようになりません。中国では、しっかり外国語を学習しているので、是非、日本でも見習いたい。まずは、自分のクラスで実践したい。

４. 学習意欲の高さ：各学校で子ども達の学習意欲が高く、正直うらやましかったです。特に甘泉外国語中学での流暢な日本語を話す女子高生には驚きました。自己実現のために目標をしっかりと定め努力する様子は、クラスの子ども達に伝えました。そして、私自身も実行しようと思いました。３と４から考えてクラスに言葉［やる気･勇気･根気･海外へ］を掲示しました。

５. ＩＴ機器の導入：中国で、ＩＴ機器を積極的に導入していることは参考になりました。

６. 学校警備員：私の学校では、不審者対応として校門は閉じられています。用事のある方はインターホンで用件を述べてロックを解除してもらいます。校舎の出入り口は１ヵ所のみ開いていてそこには受付専任員が常駐し、残りの出入り口は全て施錠して不審者が校舎内に入れないようにしています。中国では、校門に警備員がいて保護者でも中に入れないというので、児童の安全が確保されていると感じました。

７. 将来を見すえての学習：中国が発展しているとはいえ、良い条件での就職は難しいのでしょう。名門大学を卒業して将来、より豊かな生活を送るため、勉強を一生懸命にやるのは当たり前のことなのでしょう。

８. 日本の教師の総合力の高さ：中国での、特別支援学校、「自閉症の子は病院へ行く」「１ヵ月前から研究授業の準備をする」「勤務時間が 7:00 ～ 17:30」（こんなに短時間なんて現場では考えられません）等の話を聞くと、逆に日本の教師の良さがわかりました。

９. 均一の教育のメリット：中国では、よく「農村の教育を重視する」ような趣旨の言葉がよく出てきました。逆に言うと農村は、まだまだ遅れているのだろうなと想像されます。

　中国から見ると日本の教育は「特色がない」と映るようです。ところが、地方のどんな場所の学校でも同じ基準に基づいた同じ内容の教育を受けることができます。地域による教育格差のない、保護者の職業や年収に関係がない日本の誇るべき教育だと感じました。

北京の天安門前で記念撮影

長沙市の岳麗書院を訪れる参加教員たち

長沙市特殊教育学校で歓迎してくれた生徒との交流会

長沙市特殊教育学校での意見交換会

生徒の負担減に努力
松本紀子

公立でも、校長が寄付を集め、設備を充実させる資金としているという上海甘泉外国語学校の話には　驚きました。中国では校長の人脈作りも大切な仕事だということでしょう。今回訪れた学校はどこも設備が素晴らしく、うらやましく思いました。恵まれた環境の中で、教育を受けられる生徒たちは幸せだと思います。また　中国の教育は、点数主義で、経済政策と同じうに上位の者を伸ばすことに力を入れていると聞いていましたが、今回の訪問で、たぶんその弊害が出てきたということなのでしょうが、減負教育、徳育教育、体験学習など、生徒の負担を軽くし、個性を伸ばすことにも力が注がれるようになった、ということを知ることができ参考になりました。

上海甘泉外国語学校の校長先生がPISA 1位の結果について　高い点数を取っても必ずしも社会のためになるとは限らないという、お言葉に共感を覚えました。また今回、よかったのは、通訳の人から　生活指導のことや、社会制度で疑問に思っていたことに答えてもらったことです。さらに、通訳してくれた大学生とメールでやり取りをするようになりました。これは今回の訪問の大きな成果です。このつながりを大事にしていきたいと思っています。

「国家の子ども」意識
松嶋真美子

北京で中国教育部より中国の教育の現状説明を受けた時から、既に圧倒された。予備知識で潤沢な教育費を投じ、今後10年間で「マンパワー強国」を目指し、世界経済のトップに立つことを見据えた中国の方針を知っていたが、教育部が“家族の子どもというより国家の子ども”という意識に立って、教育を中国全土の津々浦々まで平等に浸透させようとする意気込みが伝わる自信満々のプログラムだったと感じた。

中国の現地通訳のホウさんが、「子どもは寄宿舎に預けるのが一般的であり、親は一生懸命働いて子どもに質の良い教育を受けさせることが生き甲斐である。そして親としての使命なのである。」と言われた言葉が印象に深い。今回幼児教育・小・中・高・特別支援学校を訪問したが、どの都市や地方に行っても、子どもたちの瞳が輝き、将来への希望を持っている所に、日本人が忘れそうになっている志の高さを感じた。

出迎えのパフォーマンスには、教育課程の範疇を超えた芸の数々にオーバーな面を感じたが、客を温かくもてなすという気持ちを教えることは、躾でもあり国民の文化と受け取りたい。

中国の教育部より、日本を訪問して、「日本の教育に個性を感じなかった」と言われた言葉が強く印象にある。日本の教育のよさは、「教育の機会均等」にある。日本全国どこに転校しても、同じ水準の教育が受けられることにある。（国立大学附属の義務教育諸学校か私立の義務教育諸学校ならば、独自のカリキュラムを組むことが可能であるが）中国側から見た日本の教育の在り方を聞くチャンスは少なかったが、言葉の業間には、中国は、日本以上の教育の成果を上げているという優位な発言が多かったと感じた。その一方で点数主義偏重の是正の必要性や徳育の教育の充実の課題もあがった。日本の教育のよさに中国側から「礼儀」をあげていただいたが、今、日本に欠けているものは何なのか「語学力」だけなのか、日本人としての誇りを持てているのか、あらゆる場面で、日本の教育はかくあるべきか問題提起を行っていきたい。

モデル校にみる意欲
三橋康孝

旅行2日目、中国政府の教育部基礎教育一司副司長のお話の中で印象に残ったのは、「中国の教育は日本から多くを学んだ」「障害のある子供はもっとも愛される子供」「日本や韓国の学校は平準化優先で、特色があまり感じられない。中国は平等化を進めながらもある面では特色化も図っていく」「徳育教育を重視していきたい。礼儀正しさは日本を学んでいきたい。」などである。これらを念頭に振り返ってみると、今回の訪問では、様々な地域で様々な種類の学校を見ることが出来た。その殆どは教育の先頭を走るモデル校と思われるが、政府が教育に力を入れていること、現場の教員も意欲的に取り組んでいることは実感できた。また、文化遺産訪問、自由時間における街歩きは、中国の歴史の厚み、一般庶民の生活に触れる機会となり、さらなる好奇心をかき立てた。

もうひとつ加えるならば、参加メンバーとの交流が私にとって収穫となった。

忙しさに紛れ、小さな世界にとどまり、考えも縮こまっていた自分を振り返る機会にもなった。

国としてのアピールの仕方
三好章文

徳島県は中国湖南省と友好関係を深め，相互の交流と協力を促進している。本年３月には第１便のチャーター便が就航した。徳島県教育委員会としては，中国（特に湖南省）との交流活動や教育旅行の誘致を進めていきたいと考えており，この機会に中国の教育制度や教育行政について理解を深めるとともに，実際の教育現場での様子や生徒との交流を通して中国の教育を直接肌で感じたいと思って大きな期待を持って参加した。

中国の教育改革が進んでいることを実感するとともに，保護者や学校との思いとの乖離なども感じ，通訳から「中国はまだ学歴社会で，公立は十分な教育が出来ないので幼稚園から寄宿舎の私立に入学させ親はしっかり働く」という話も聞き，中国も様々な課題を抱えていると感じた。

印象に残った言葉は，中国教育部の説明で「日本の教育には特色がない。」といわれたことで，遺憾に感じていたのだが，今回の訪問で中国のアピールの仕方は上手であると感じた。日本の教育は他国に引けをとらないものであると私は思っているが，日本では頑張っていることでも控えめに言って，謙虚さをよしとする風潮があると思う。日本で普通と思うことでも世界では素晴らしい教育と感じることもあるので，もっと自信を持って頑張っていることをアピールしていくことが必要であると感じた。

また，どこでも，学力向上の一番の対策は教員の質の向上であると言い切っていたことも非常に印象的であり，生徒が頑張るより先に教員が頑張るという考え方は日本も参考にする点であると思った。

中国の生徒も，日本の生徒も子供達の本質に大きな違いはないと思う。どのように教育するかで変わってくるものである。中国の生徒は日本の生徒に比べて素直で学習意欲，社会貢献への意欲，親や教員に対する尊敬の念が強いと聞いており視察した範囲でもそのように感じた。そのような生徒を育てている中国の教育の良い点は学びつつ，日本の実態に応じた教育を実践していくことが必要であると感じている。

気になる埋もれている問題
丹羽美由紀

中国は文化大革命後、目覚ましい経済発達をとげてきました。そして経済発達とともに教育も発達をとげたと思います。その発達はどのようにして成し遂げられ、今後もどのように発達していくのか、また PISA での上海の世界一位という結果はどのようにして成し遂げられたのか、ということを疑問に思って、中国に旅立ちました．今回は北京，湖南省（長沙市），上海の３都市を訪れることになっていましたので、北京・上海では都市部の先進的な教育、長沙市では農村部の教育に触れることが出来ると思っていましたが、長沙市においても、北京同様とても先進的な教育であったと感じました。

またこの研修を通して「一人っ子政策」が印象に残りました。一人っ子政策については私が学生だったときに教わり、最近ではすっかり忘れていましたが、今回の訪問で何度となく耳にしました。今なおこの政策は続いており、そのことが現在の子どもの教育や家庭の生活スタイルにも大きく関わっていることを知りました。子どもが一人であるので、教育費をかけることができる一方、大切に育てて家事をさせないため、子どもは家事ができないまま大人になってしまう、という問題点もあると知りました。今回の研修はバスで移動することが多かったのですが、その際も就学前の子どもの姿を見ることがとても少ないと感じ、この原因は、とても小さい時分から保育園にそれも全寮制のところに入れる人が多いため、あまり子どもの姿を目にしないのだとわかりました。「全寮制の学校に入れるために働き、そして全寮制に入れ、子どもと触れ合う時間は少なくなっていく」というサイクルが出来ているのですが、これは良いことなのだろうか、いや、良い悪いという問題ではないのだろうか……と考えてしまいました。

心に残った発言は、不登校やいじめについての質問に対する答えで、「不登校はない」と言われたことです。またその際「学校に来させるのは家庭の役目である」と断言されていたところに、今の中国の実際を少し垣間見た気がしました。学力をアップさせることに成功している一方、不登校などの問題が埋もれているのではないか、ケアがなされていない子ども達がたくさんいるのではないか、それとも本当にまだそのような問題は多くないのかもしれない、とも考えました。

「素質教育」という言葉も聞きました。それは「良い性格・良い価値観を身につけさせる」、「学校での学習時間を減らし、子ども達が興味関心のあることを学べるようにする」ということですが、なかなか難しいことだと思います。日本でもそのような考えがゆとり教育となりましたが、今はゆとり教育が実施されたことが批判され、またそれ以前の教育体制に戻りつつあるので、素質教育が批判されることがないように行われてほしいと思います。

また障害児教育については，障害をもつ子ども達を「もっとも愛すべき子ども達」といわれたことはとても印象に残りました。しかしまだ公的な学校は身体的な障害をもった子ども達が対象で、知的障害や発達障害などは医療法務担当で有料である、という点が気になりました。日本では発達障害を持つ生徒に対する教育支援が不可欠なものとなっているからです。今後、検討すべきことになるのでしょうか。

学ぶ必然性

小笠原晃

中華思想をもつ国というイメージだったので、中華人民共和国教育部基礎教育一司　王定華副司長が、隣国の教育に学んでいるという言葉が印象に残っている。また、岳麓書院における「千年学府」の扁額のとおり湖南大学に、その伝統が脈々と引き継がれていることに、悠久の歴史をもつ中国が実感された。

中国では、親の恩、先生の恩、社会の恩、そして恩返しの精神が培われているという。かつての日本もその風潮が強かったように思うのだが。秋田県に学力向上の研修視察に来られた方々から、「学力の秘訣は何か？」と聞かれたときに、「その一つは秋田ではまだ先生を尊敬する学校文化の基盤がある」と答えることにしている。長沙同升湖国際実験学校の校長は、「学力向上は、記憶力と集中力、そして受験力であり、その秘訣は企業秘密である」といっていた。いかにも企業設立の学校と思った。

中国では子どもの負担軽減から宿題には規定があるという。それは、猛烈に勉強する下地があっての規定である。日本語スピーチコンテスト中国１位の彼女が、「公務員になって国家のために何かできるようになりたい夢をもっているから勉強している」といった言葉が、これを象徴していたように思う。学ぶ意欲は、何のために勉強するのかという学ぶ必然性に基づくもので、日本で希薄なっている部分ではないか。

湖南省には25の大学があり、中南大学は５万人、湖南大学には３万人の学生がいるという、改めてスケールの違いを感じた。北京第一実験小学校の理科室ならぬ環境教室（山の教室、海の教室）の発想は新鮮であった。また、特殊教育学校に設置されていた防災教室・煙体験ゾーンは、大震災直後ということもあり時節柄これからの学校教育として重要視されるものと考える。

外国語教育に力を入れていること、義務教育の普及を推進していることなどとともに、現在の中国を代表する言葉として、王定華副司長の「特別支援教育を必要とする子どもは最も愛されるべき子どもである」という言葉が最も印象深かった。ノーマライゼーションの考え方はどこの国でも同じであると思ったが、特別支援教育の実際の指導の場面を見学できなかったのは残念であった。また、モンスターペアレンツについて伺った時、「どの職業になるにも免許が必要であるが、親になる免許はない。」といった言葉には含蓄があった。しかし、どの場面でも、触れ合った子どもたちは、素直で明るく輝く瞳をもち、希望や夢を膨らませているように感じた。いつの時代でも、どこにおいても、未来は子どもが創るものであることを強く感じた。

地元ガイドでなくては聞けないエピソードにも、中国文化を肌で感じることができた。長沙はマッサージ師の首都、２千年前のしなやかなミイラの発見、墓所の製作は生前から数十年を要して、伝統工芸である数百万円の刺繍、かつては個人の所有という贅の限りを尽くした庭園、右折の合理性、命懸けの道路横断、飲料水の貴重さとともに、中国人投資家の日本の水源地買収の結び付きが妙に納得できた研修であった。

教育の最終目標

酒井淑子

研修前にいただいた文部科学省発行の「諸外国の教育改革の動向」６中国　Ⅱ改革の方向に、13億の膨大な人口を「重くのしかかる負担とするのではなく、人口資源を持つことの有利さに転嫁させる」という国家発展の原動力とし、また国民の資質を向上させ、かつ優れた人材を育成することを目指していると記載されていた。「人は資源である」との言葉に強く教育に対する重要性を感じた。日本は，資源もなく本当に“人を資源”としなければいけない国である。これまで通常の業務の中で、日本という国を支える人材作りという視点で日々の教育をあまり捉えていなかったが、今

回このプログラムに参加させていただき、大きな観点で－国を支えていく一端を担う若者の育成－」という面での認識を新たにした。

ところで、中国の教職員は公務員ではなく、公立学校においては国と契約を結んでいる立場にあり、勤務形態の違いも興味あることであった。また、教員の資質向上についても競争原理がはたらいており、特級職員の表彰等が実施され、顔写真が学校に掲示されていたりした。

今回の訪問は中国の先進校視察であり、農村部での状況は実際目にすることはできなかったが、やはり中国は教育の面でも恐るべき強豪国である（科挙の制度を見ても、過去より学習に対する高い意識が存在している）ことは紛れもない事実である。ただ、上海甘泉外国語学校長が「学力テストがよくても社会のためになる優秀な人材になるわけではない。教育の質の鍵は、将来社会のためになるか、社会に適するかにある。」と言われたが、そのことばは胸にずんとくるものであり、社会に役立つ人材づくりを私の教職の目標としたいと思った。

トップリーダーを育てるという点で中国のシステムはとても有効的であると思われた。一方，日本は全国どこでも同じ教育内容を平等に受けることができる。このことは、世界的に見てもすばらしいことであり、それが日本を支えている原動力になってきた。これからの日本が世界での地位を低下させないためには、教育がさらに重要な面を占める。生徒に学習の必要性を認識させていくとともに我々教職員が教育の最終目標を何に定めるかにかかっているように思われる。

中国教育部で日本の文化教育には特色がないと言われた。日本は良い教育をしているが、そのアピール度が不足しているのではないか。もっと胸を張ってよい部分を海外にも発信していく必要性を強く感じている。そのことが、正しい日本の理解にもつながるのではないか。

長沙外国語学校で日本語の授業に参加する教員

長沙外国語学校で生徒たちと交流する教師

北京第一実験小学校の生徒たちと記念撮影

挨拶する上海市教育委員会国際交流処陳莉莉副処長

もっともっとつながろう
柴田眞弓

山口県は、30 年前から中国山東省と友好姉妹都市を提携し、美祢市においては、1993 年から棗荘市と姉妹都市として友好を深めている。昨年度は、教育長・教職員・中学 3 年生が棗荘市を訪れ、つながりを深めてきた。

今回の私の中国への訪問理由は、中国の教育制度を直接自分の目で確かめ研修を深め、秋に中国の教職員を美祢市に迎えることで、より友好の輪を広げることであった。

研修のテーマは『中国と日本　もっともっとつながろう！』と決め、中国語も英語もままならない私だが、何とか笑顔と真心で心と心をつなげていこうと考えていた。

初日のオリエンテーションの昼食懇話会で、日中関係において教育のつながりは大切なもので政治や国際情勢とは無関係であり、そのために、このプログラムが続いている。という中国大使館の史光和さんの言葉に感銘を受けた。子ども達を健やかに育てるという教育への熱い思いは、国を超えて相通じるものがある。中国の教育行政は、今まさに変革の時を迎えている。2011 年に 10 年計画の「国家中長期教育改革・発展計画要綱」が交付され、教育の質の向上と教育の機会均等化によって、より先進的な教育を目指している。
教育事情としては、都市部・地方・少数民族・特別支援教育と大きく四つの構造が絡み合って行政改革が進められている。

また、一人っ子政策からの歪みに対しては、学校現場でどのように対処されているのかについては、まだ不明な点が多い。ただ、北京第一実験小学校の取組の一つ、「心語広場」で心を落ち着けさせたり、長沙同升湖国際実験学校が、地域や保護者との連携を強化していたりすることから、取組の一端が理解できた。

また、国際的な視野を持つ子どもの育成のため、長沙外国語学校や上海甘泉外国語中学では、母国語と外国語の二か国語の学習等、学習内容や量ともに特色が感じられた。これは、日本の教育で、子ども達に『夢と希望を持った生きる力』を目指している事と通じる。しかし、中国教育の誰にも負けないほどの競争力を持ったエネルギーを目の当たりにして、この違いは、中国と日本の置かれている社会情勢の違いからくるものではないかと思われる。

異文化を持つ中国と日本が、本プログラムの目的である相互理解と友好を深めるためには、さまざまな在り様があると思われるが、中国初体験の私にとって、今回の訪問が中国を理解することの第一歩になったことは間違いないと思っている。日本の良さは、わび・さび・人情・思いやりなど『和』の文化があることと考えている。心と心のつながりで、交流を深めていきたい。
『いつも　にっこり　（天々微笑）　心　ほっかり　(天々温心)』

これは、私のモットーとしている言葉だが、
心と心をつなぐ　（心与心交網）

これがこれからの中国と日本の教育に大切だと考えている。
心　ほのかに　伝えていきたいと考えているが、残念なことにこのあいまいで抒情的な言葉は、中国語に訳せないのだそうだ。それでも、私は日本文化を、そしてそこに息づく日本の教育を少しでも伝えていきたいと思っている。

躍動する国…中国
鈴木明彦

近くて遠い国、そして、自分には相容れない国、それが中華人民共和国への意識だった。そうは言っても中国の先生方が来校したときは、丁寧に誠意を持って答えようと思っていたし、できる限りの対応を本校としてしてあげようとも考えていた。他の先生達に呼びかけ交流会等も開いてもらった。しかし、どこか心の隅で他の国の人たちとは異なる何らかの引っかかりがあったのも確かであった。実際に視察に来た訪問団の人々を迎えたとき、特に何も思わなかったし感じもしなかった。訪問団の人がとても疲れているなと言うぐらいの印象しか残らなかったのも事実である。私たちがしたことが何か役に立ったのだろうかと疑問に思ったりもした。

ところが今回訪中を行い、個人的成果は何かと問われれば、中国に対する親しみが増したことだろう。中国という国や人々の息づかいが近くになったということだ。

でも、帰国して最近の東シナ海の領有権問題等のニュースをテレビで見るにつけ、中華思想で育ってきた彼らの歴史の重みや、その強引さを理解できない自分が未だに存在しているのも確かだと思う。

つまり、当たり前のことでしょうが、礼をもって礼

をつくすような「お迎えの会」よりも、百聞は一見にしかずの「訪問」をした方がぐっと親しみや相手に対する理解の度も増え、霧がかかっていた脳が少し晴れて明るくなったと思う。ぐしゃぐしゃと思っていたことが整理できたし、自分が今まで日本国内で得た知識や経験を基に進めてきた教育についても振り返りができた気がするし、納得もできた。

中国の全体の印象は「躍動する国…中国」である。東京オリンピックの頃の日本は、砂埃でほこりっぽかったという話を聞いたことがある。それと同じように、開発ラッシュの中国においては、まさに「土埃のする中国」であった。汚く見えるところはどんどん壊し、新しい建物をがんがん建てる。摩天楼のような高層マンション群、勢いと、足踏みをしない日々を感じさせるクレーン車の数々、そういえば、福島原発に水を注入するためにコンクリートを流す機械が中国から送られてきた。この建築ラッシュをみて納得させられる光景だった。ただ、そこに住んでいる人の人権や補償などはどうやって解決するのだろうかと疑問に思う。

教育もしかり。怒濤のような進化をはかる教育。日本の各大学が完全征服されるのもそんなに遠い世界ではないような気がする。それほどまで優れた人材を作り出すことができる国になった中国。子どもたち一人一人が夢をもち、前を向いて歩いている国、そして統制された美を持って感動を与えてくれた子どもたち、元気で明るい笑顔の中国の子どもたちに賞賛と拍手をもってこの訪中を締めくくりたい。

最後に、この経験がより公平な見方や考え方、そして次世代の子どもたちに伝えていく力に、さらに日本の子どもたちへ何らかのメッセージを与えることができるように努力をしたい。

教育観を見直し

高橋龍雅

最初に参加についての話をいただいたときは、震災から間もない時期であり、先の見通しが立たない状況だったために複雑な思いであった。しかし今は、参加できて本当によかったと、感謝の気持ちでいっぱいである。

様々な教育施設を訪問したことは、自身の教育観を見直すよいきっかけとなった。中国では中国の現状に則した教育活動が展開されており、言語や政策の違いこそあれ、教育の社会的重要性は世界共通であると感じた。「教育の質向上のためには教員の質向上が重要である。」ということで、様々な政策が進められていた。優秀な教員を育成するために、師範大学に優秀な高校生を集めたり、農村部の教育力を高めるために都市部の教員を派遣したりするなど、国を挙げて教育に力を入れていることが強調されていた。中国の数ある学校の中で訪問したのはわずか５校であり、しかも中国国内でも最先端の教育実践校であると思うが、中国の教育に対する情熱は十分感じとることができた。

子どもたちは勉強漬けの生活を送っているということを聞き、軍隊のような雰囲気かと一瞬想像したが、全くそんなことはなかった。教室では生き生きとした表情で授業に取り組んでおり、休み時間などは、校庭でバスケットボールをしたり友達と楽しそうに過ごしたりする姿があった。声を掛けると笑顔で「ニーハオ」、「こんにちは」などと応えてくれた。子どもたちの明るく元気な姿に心が温かくなるとともに、日中友好の明るい未来を感じた。

各教育施設訪問で中国の教育事情について理解を深めることができただけでなく、日本訪問団の方々から各地域での教育活動について情報交換できたことも、大変参考になった。ほんの一部分ではあるが外の世界を知ったことで、自分の住む地域の教育活動のよさも再認識できたことが、もう一つの大きな収穫であった。

帰国後、校庭には仮設住宅が建設され始めていた。教室で子どもたちの前に立ったとき、子どもたちを見る目が出発前とは大きく変わったと自分自身で強く感じた。今回のプログラムでの「一期一会」の出会いを通して、子どもたちが日々成長する姿を見ることができる喜びとその責任の重さを自覚し、教員であることの自信をもつことができた。

国策教育の重点
高橋 猛

最初に訪問した中国の小学校では、40 分授業で 6 時間～ 7 時間の授業が行われており、2 年生でも 4 時過ぎまで授業していることに驚いた。理科の教科書を見せてもらうチャンスがあったので日本の教科書と比較したところ、日本よりも難しく観察や実験を通して学ぶというよりは理論を覚えるような内容であった。

中国は一人っ子政策により、子どもに対する家族の期待がとても高く、教育にも力を入れている。上海の学校の先生の話では、子どもの教育にかかるお金は自分の収入の四分の一にもなるそうだ。

上海で学校内を案内してくれた高校生は、「勉強をしてレベルの高い大学に入り、国のために仕事をすることが夢です。」と答えてくれた。

少し大げさかもしれないが、国を動かすほんの一握りの人材を育成するために、国家レベルで教育に力を注いでいるという感じを受けた。

また、中国の子どもたちは、一人一人がとても生き生きしていることに驚いた。日本の子どもたちの中には、外国の人が来ると尻込みをしてしまう子どももいるが、中国の子どもたちは意欲的に話しかけてくる子どもが多かった。日本語であいさつをしてきたり、中には「SMAP」を知っていますか？と日本語で聞いてくる子どももいた。

授業中を見ても、挙手をして発表する子が多かったり、音楽の時間に独唱で堂々と歌える子どもがいたりと、活気に満ちあふれていた。それは、中国の教育における子どもの評価にあると感じた。

中国の教育では、どの学級がすばらしく、学級の中でどの子が優秀であるかが一目で分かるように工夫されていた。子どもたちは、学級が認めてもらえるように、自分が認めてもらえるようにと一生懸命努力しているのだと思う。

日本では、個人の能力を比較して差を付けるようなことはほとんど行わないので、中国の教育に少し違和感があるが、個々のやる気を引き出すには、そういう方法もあるなと感じた。

また、このプログラムに参加した他の県の先生方との交流も有意義なものとなった。各県の教育問題を話し合ったり、学校での悩みを相談したりするなかで、他県の先生方とのネットワークができた。そのつながりは、一生の宝にしていきたいと思う。

中国教職員を迎えるため
寺尾俊二

私にとっては初めての「海外」視察であり、その地が、荒尾市が交流を深めようとしている中国でしたので、大変興味があり、有意義な訪問となりました。訪問させていただいた学校は、どこも広大な敷地にすばらしい施設･設備、そして、充実した教育予算でした。

さて、中国の教育事情は、事前にいただいた資料を読むことである程度の知識を持って臨み、実際中国教育部の説明である程度理解することができました。「9 年間の義務教育の無償化」「学校間格差・教員格差の解消」「平等教育」「特別支援教育の重視」「農村部の子どもの教育」「徳育の重視」等について、教育部の説明を訪問した学校でも同じように確認することができました。特に、不登校生が出てきたことで、子どもにストレスをかけないように、宿題を減らすことや塾などで休日がない子どもへの対応など、ある意味日本で起こっていることが中国でも始まっているのだなと感じました。また、訪問した学校で一番印象に残っているのは、長沙外国語学校でした。日本語の授業を見せていただき、授業後も明朗で活発な生徒と触れ合うことで、あらためて日本語教育に力を入れていることがわかりました。それは、長沙同升湖国際実験学校でも上海甘泉外国語中学でも同じことを感じました。私たちが行っている外国語活動の授業が、将来生きて働くものになるのか考えさせられました。

次に、今回の目的の一つが、今年 10 月に中国教職員を受け入れるにあたって、昨年受け入れた教育委員会及び学校の先生方との情報交換でした。初めて受け入れる側にとって貴重な情報をいただくことができ、とても感謝しています。10 月の受け入れに向けて準備を進めていきたいと考えています。

連帯する力を信じて
植村訓子

今，教育現場は、ガラスの城をイメージさせる。そこに働く我々教師は社会の眼にさらされながら、次々に湧き起こる諸問題の解決を求められている。緊張とストレスで疲れながらも、多様化し、新しい展開を見せる子どもたちや親たちと向き合い、近景のわずかの空間の中で日々持ち上がる問題と格闘している。「自分たちは , 遠景＝未来（無限大の可能性を持つ世界）

を見る力を失いつつあるのではないか？それが夢を語れない子どもたちを作っているのではないか」と思う時がある。国際交流とは、まさにこの遠景の中で、人やものを見極め、国を越え、民族を越えて連帯する力だと考える。

そんな折、昨年度，多くの中国教職員が来島（壱岐）した。ちょうど外交上、政治上の国際問題が持ち上がり、果たして来るか来ないか職場でも子どもたちの間でも話題沸騰の中、飄々とやってきて、積極的に関わりを持って、そして、新しい風を起こし帰って行った。教育に携わる者は国境を持たない親善大使ではないか？その思いから、対象の年齢制限に大幅に引っかかっていたにも関わらず、校長にお願いし、応募したところ幸運の切符を手に入れることができた。

中国国内において一体何カ国の人に出会えるのかを目標につたない英語で話しかけてみた。中国人（大学生クラスの人たちは聞き取りやすい英語を話し、親切であった。）、アフリカ人（フランス語を Official Language にしているようで、英語は得意としなかった。）アメリカ人とドイツ人（上海で声をかけたが、２人とも学校視察を目的としていた。）オーストラリア人（観光で中国に初めて来たとのこと。）、インド人（この親子は 45 名の団体旅行団の中のメンバーで、上海から分かれて香港・マカオを見物して帰国。現在メール交換をしている。）とちょっとした出会いがあった。中国は、各国から訪れている人を探すのに事欠かない国である。これは、授業の中で英語を学習の motivation を上げるための話の種となっている。

訪問校においても英語で話しかけると、恥ずかしそうにしながらも逃げ出したり、無視して通り過ぎたりせず、コミュニケーションを取ろうとする子どもたちの方が多かったと思う。アジアの他の国々でも施設や学校訪問を数カ国行った時と同様、子どもたちの笑顔が明るくて、人なつっこい。そして、アイコンタクトをした時、生き生きとまっすぐに相手を見つめる目の表情が日本〈自分の学校の生徒を含む〉の子どもたちと異なると感じたのは私だけだろうか？

また、印象深いことばとして、「自信は基盤となり興味は最高の先生となる。」といった校長がいたが、結果にこだわり、競争力をバネに教育力を伸ばそうとしているその根底にあるのはこれなのか？

最後に、13 億の中国人の中にまだ育っていないものがあるとすれば、平和・人権教育ではないだろうか？１年間を通して、日本の教育の根幹を形成する「平和と人権に対する意識と感覚」は、長崎県の教育現場では、８月９日の平和集会を前に、最も熱く語られ、授業に組み入れていく。いつの日か、平和・人権教育が中国との間で語られるようになった時、アジアのみならず、地球規模で幸福な世界が訪れるのではないだろうか？

多い共通点と大きな違い

吉田克義

本プログラムの参加にあたり、まずは、「震災にあたり、国内外の多くの皆様から暖かいご支援や心のこもったお励ましをいただいたことを、被災者を代表してお礼を伝えたい。」と考えていました。また、中国訪問にあたり、私個人の課題を「中国の教育政策や実際の教育現場を視察し、わが国の教育と比較しながら見聞を深め、今後の教育のあり方について考察したい。」、「最近発展がめざましい中国の都市や文化・人々の生活などを視察し、今後の授業に生かしたい。」という目標を立てました。私は社会科を担当し、授業で中国について教えておりましたが、実際に中国に行ったことがなかったので、中国の教育だけでなく、政治・文化・経済・人々の生活など幅広く見聞し、授業に役立てたいと考えました。

とにかく圧巻だったのは、中国の都市部の発展状況です。その発展ぶりを実際に見ると、昨年、日本を追い越し世界第２位の GNP となった勢いが十分理解できました。また、今回訪問した都市部にある中国の先進的な学校は、施設・設備が素晴らしく、外国語教育や芸術活動もたいへん盛んでした。しかし，中国の教育部の説明では、都市部と農村部の教育格差が大きな課題となっていることを知り、日本の教育制度やその内容が、いかに均質的で進んでいるかを実感することができました。中国と日本は古代から交流し、道徳の教えや同じ漢字文化をもつ国として、共通点も多いように思いますが、常に自分の考えを主張する大陸の文化と控えめなことをよしとする島国日本の文化とは、大きく違うことにも気づくこともできました。

中国の北京市、長沙市、上海市や今回訪問させていただいた学校は、どの学校も、たいへん親日的で、日本語教育（外国語教育）や国際交流がとても盛んで、日本の市町村や学校とも直接友好関係を結ぶことができそうな手応えを感じました。また、このプログラムに一緒に参加された日本国内の素晴らしい先生方とつながりをもてたことも大きな収穫となりました。

6. 課題と成果

相庭建次

[最も有意義だった内容]

1. 湖南省教育庁での陳湘生副庁長の湖南省がとり組んでいる教育政策が今の中国の勢いの原動力になっているような印象を受けた。毎年外国の専門家と外国人教師15000人以上を招聘し各学校に配属させるなど、省独自でよくやっていると思った。

2. ＡＣＣＵの派遣プログラムには日本の小、中、高それに教育委員会と普段の我々の教育現場では一堂に会し得ないメンバーが集まり、小、中、高それぞれの視点から日本の教育について話をし得たということです。日本の先生方は預かった生徒はすべてを責任もって教育している点にあり、決して中国の教育現場には負けていないと実感しました。

[訪問前の課題]

中国の学校教育では資質のある生徒は徹底的に伸ばすと聞いていましたので、成績のいい生徒をどう伸ばしているのかを深く知りたいと考えていました。特に同升湖国際実験学校における高校でのショートプログラムを具体的に知りたいと考えていました。

[成果]

長沙外国語学校における日本語教育の実戦授業の方法、日本の授業では板書に重点を置き書いておぼえさせるにあるが、長沙のやり方は実際の発音、発声されている映像を見せてそれを3回繰り返し反復しその場で全員に覚えさせるという教え方には参考となる点が多くありました。また授業の途中で、理科の進んでいる生徒に教壇に立たせて、生徒が生徒を教えるということは非常に面白いと思いました。

[今後の日中交流]

この視察を通して中国の生徒達は学ぶということに熱心であったことが胸を打ちました。学ぶことに対して熱心に取り組む姿勢はどこからくるのか、日本の我が高校に入れてその姿勢を学ばせたいと思いました。本校（鎮西学院高校）は中国との交換交流を望んでいますが、まだ実現には至っていません。長崎県の協力も得て、中国の生徒との交流、教師との交流を短時間でもいいから持ちたいと考えています。

福田洋一

最も有意義だった内容]

1. 中国国内における授業参観ができたこと。ＩＣＴの活用、発問や板書、掲示物、教科書、生徒への指示、授業展開、外国語指導の考え方など、これまで十分には知ることができなかった教科指導について、直接、参観し、雰囲気を感じることが最も有意義であった。特に、児童・生徒の学ぶ姿勢、自らの考えをしっかりと述べようとする姿に感銘を受けた。

2. 中国の教職員と交流し、考え方を直接伺えたこと。地域の発展に貢献できる人材の育成を徹底的に行い、経済や社会の発展を積極的に進めている現状を確認することができた。授業のために丁寧に準備する教師の姿や生徒の成長に全力を傾注する姿は、日本と同じであることと感じた。

[訪問前の課題]

1. 外国語活動の現状について理解を深めたい。

2. ＷＥＢ会議システム等により、今後継続的に交流ができる可能性について把握したい。

3. 中国で使用されている教科書等について確認したい。

[成果]

1. 訪問した小学校の多くが小学校第１学年から外国語（英語）について学習していること、また教科書をしようしていること、会話が重視された指導が行われていること知ることができた。

ｉ. 特に、上海甘泉外国語中学において、ＷＥＢ会議を行う施設があること、実際に国際交流が行われていが、継続的な交流ができる可能性を確認することができた。

ii. 実際に使用されている教科書を手にとってみるこ

とができた。内容や挿絵、課題の提示など参考になった。

[今後の日中交流]

１．ＷＥＢ会議による中学生の交流活動。多摩市立中学校と上海甘泉外国語中学校等とのＷＥＢ会議を具体的に進めていきたい。時差も少なく、比較的交流しやすい面はある。条件や内容等の議論は必要となるため、課題もあるが、実現を目指した調整を行っていきたい。2.10 月 16 日から 20 日まで、中国の教職員 30 名を多摩市にお迎えする予定である。小・中・特別支援学校等における交流活動を充実させていきたい。

橋本正明

[最も有意義であった内容]

中国のいろいろな学校を訪問し、短い時間ではありましたが、子どもたちや先生方とふれあえたことが大きな成果です。「ニイハオ」と話しかけると、どの子も満面の笑みで「ニイハオ」と返してくれました。子どもの純粋な心と笑顔は万国共通です。自分の勤務する学校でももう一度、子どもたちとの関係を見直したいと思いました。握手を求められたり、いっしょにカメラに収まったり、本当に貴重なうれしい経験ができました。一方で中国語ができないもどかしさも感じ、語学力の必要性も再認識しました。また、今回、日本各地から研修に参加した先生方といろいろなお話ができたことも有意義でした。「一期一会」という言葉をしみじみとかみしめた研修会でした。

[訪問前の課題]

特別な教育的ニーズを必要とする子や保護者に対する支援体制について。

現職教員の力量を高めるための研修のあり方について。

教育の機会均等と教育格差、義務教育の実施について。

環境教育や道徳教育の実施状況について。

[成果]

長沙市の特殊教育学校では、障害をもつ子どもたちの発表会を見せていただきました。ここまで仕上げるのにどれほどの時間がかかったのかという思いとともに、参観者から大きな拍手をもらうことによって、子どもたちの自尊感情が高まると思いました。たくさんの成功体験や将来の自分に必要な生活力、生きていくための力をそだてることの大切さを学びました。また、教師の研修についてはあまり詳しく聞けませんでしたが、教師の評価が日本よりシビアな分、教師自身の自己研修が定着しているのかも知れません。いずれにしても、学校の掲示コーナーに教師の功績が張り出してあったりすることで、常に職員が意識できる環境があると思いました。

入学率はほぼ 100 パーセントということでしたが、地域間格差は存在しているようでした。日本の 26 倍もの広大な面積をもつ中国では、まだまだ格差是正には年月が必要な気がしました。

徳育教育については、生活の中で学んでいくことが基本で、社会や先生、親に恩返しをしていくというのは、ひとつの国風のようでした。中国のよき伝統が継承されていくことを望むとともに、日本が見失いかけている恥文化を再考する必要性を感じました。

[今後の日中交流]

昨年度、近江八幡市は中国からの教職員の訪問を受けました。その中で、武佐小学校は終日日程で研修交流を行いました。体育館で歓迎の児童集会を行い、演技や歌を発表し、中国の先生方からは「四季の歌」の披露がありました。給食も各クラスに分かれて一緒に食べていただきました。授業参観後の校内研究会（教職員交流会）では、子どもの様子や指導のあり方、教師の資質向上などについて意見交流を行いました。教師同士がゆっくりと時間をかけて話し合うことはとても意義あることだと思いました。駆け足の訪問よりも、学校に負担はかかりますが一校でじっくりと交流する方がいいと思います。

速水政明

[最も有意義であった内容]

どの都市の教育も着実に発展している現状を見て、国家体制から個人の成長を重視しつつあるのを嬉しく思いました。個人の人権という民主主義体制まで進んではいないが、やがて行き着くであろう民主化の流れを垣間見ることが出来たことが収穫であった。

[訪問前の課題]

中国の発展が文革から天安門を経て改革開放に至り、そこから経済発展の流れが加速した。やがて、オリンピックと上海万博を経験した中国の国情の変化はいかがか？がテーマであった。

[成果]

中国は着実に発展する。軍事大国となり経済大国と

なることは間違いない。キッシンジャーが見透かしているように、世界のリーダーになるには、精神面の発達がカギとなる。

[今後の日中交流]

ACCU などの紹介によって、日中交流のお手伝いをしていくか、姉妹校交流で、毎年着実に友好を深める以外にない。

土方美和子

[最も有意義だった内容]

1. 北京教育部、湖南省教育部訪問。国や地方の中枢である教育部や教育庁を訪問し、具体的な説明を聞くことができ中国の教育事情の全体像を捉えることができた。事前のオリエンテーションで文科省専門職新井聡様から「視察した時にその背景にある状況（社会的背景：社会、文化、歴史等）について考えることが必要である」というお話しをいただいていたことが、単なる「視察」や「話を聞く」というスタンスではない学校訪問時の想像力を高めることに役立った。学力向上＝教師の質の向上、教員研修の充実、学校と家庭の教育に対する役割の明確化が中国の教育の根底にあることに驚きと同時に感心した。

2. 長沙外国語学校での授業参観と生徒との触れあい。中学高校一貫した教育活動を行い、中学では英語と共に日本語を第一外国語としているこの学校では１年生の授業を参観することができ、教室内の掲示物、生徒のもっている学用品等も見ることができた。ICT 機器を活用した授業での生徒の反応や、プリント学習、発表活動など積極的に行われていた。特に、日本語教員の授業は最後の授業ということで別れの歌「ありがとう　さようなら」の披露もあり、心温まる場を一緒に過ごすことができた。中学校の教員として、大変興味深く授業終了後の短い時間ではあったが生徒と日本語で話すことができ、大変有意義であった。生徒の明るさ、礼儀正しさ、素直さに直接触れる機会が何よりであった。

[訪問前の課題]

1. 道徳教育に関する取り組みやその特徴および実施方法。

2.ESD および環境教育に関する取り組みやその特徴および実施方法。

3. 教育活動における伝統文化への取り組み。

4. 日中教職員間交流の今後の課題。

[成果]

1. 徳育を重視していることが、中国教育部や北京第一実験小学校の説明で理解できた。特に北京第一実験小学校では

・親を大切にすることは社会全体として中国人の伝統である .

・親を敬うことは親のしつけ。

・徳育が先というという理念→最も重要で専門の教員もいる。説教ではなく生活の中で体得する等という話があった。北京だけのことかと思ったが、どの学校を訪問しても親や教師を敬うという理念は同じであったことに感心し（日本では全くといっていいほど無くしてしまった信条）最後は日本の家庭や学校では既になくしてしまっている本当の心の教育の必要性を認識した。

2. 環境教育は徳育の中で取り組んでいる。農業体験は単なる労働行為ではなく、植物や動物を認識し楽しさを教えるものであるという位置づけであること。日本の環境教育の意識の高さに理解を示していることがわかった。一方で、中国は都市部を中心に急速な経済発展による環境汚染が問題になっていることも事実である。このような状況を学校教育ではどのように扱っているのか知りたいと思う。（ESD に関しては話にもあがらなかったことで、何も質問できずに終わってしまった。反省点である。）

3. 中国教育部では徳育の六つある項目のうち文化教育（学校の文化）をあげていた。日本で重視されている伝統文化教育と同じような教育が行われているのかが、十分わからないままであった。しかし、どの学校も自分の学校教育に自信と誇りを持ち、徳教育に関しても日本の現状よりは社会全体として充実していること、上海甘泉外国語中学では、将来公務員になり国のためになりたいという発言から、自国に対する愛国心は強いことが伺えた。

4. 今回の交流に際し、中国側の訪問校選定はどのように行っているのかを ACCU の方に伺った。中国教育部と文科省の間でのやりとりであること、中国側の学校は中国側で決めること、あらかじめ希望は出すが最終的な決定は中国側で行うことがわかった。

交流を継続していくためには、互いの国を理解すること、共に学び合うという意識をもつこと、共に触れあい語り合うこと、体験すること、自分ができることを考えること等が必要であると今回のプログラムに参加して痛感した。昨年度は受け入れることが精一杯で、中国の教育事情も全くわからないままの交流であ

首に赤いマフラーを巻いた小学生の一団とすれ違う。北京第一実験小学校にて。

ったことが悔やまれる。今回参加して、このプログラムの目的を認識し交流することが課題ではないかと考える。

[今後の日中交流]

本校では、今年度 WEB 会議を通して海外の学校との交流を考えている。昨年度までスカイプを活用し、生徒会と英語科教員がドイツやカナダの学校と交流を図っていた。時差のほとんどない中国の学校との交流は選択肢の一つであると考えている。

具体的には上海甘泉外国語中学との交流を視野に入れ、英語科（授業中の交流）及び生徒会等が中心となっての交流（行事等での交流）ができればと考えている。また、1 年生の英語の単元では中国について学ぶ機会があるため、生徒の中国に対する知識や興味もあること、英語科教員の中にはドイツの企業に勤め海外生活も長く国際交流に対する見識が高い教員もおり、上海甘泉外国語中学との交流については前向きに検討していきたい。

鎌塚房夫

[最も有意義であった内容]

中国の小・中・高校生の学習意欲が高いことに驚きました。日本でも意欲がある子はいますが、公立学校では意欲を出すと学級の友達の目を気にして、なかなか積極性を出しにくくなっています。中国の子のように、素直に積極性を出せばよいのにと思いました。また、意外に子どもたちが学校生活を楽しんでいるのも印象に残りました。どの学校も子どもたちが笑顔で迎えてくれ、すれ違う子どもたちも楽しそうでした。教師に対する従順さと両親を大切にする子が育つ環境がわかってよかった。

経済発展する中国の活気を直接見ることができました。社会主義国でありながら貧富の格差が大きいこともわかり、中国政府のこれからの舵取りの難しさが想像されます。

中国の教育と比較することにより、逆に日本の教育の良さがわかってきました。

[訪問前の課題]

私のクラスに在籍する（かつて在籍した）中国の子

は、勉強する目的が、よい生活をするためやお金を儲けるためのような利己的な動機でなく、社会のために貢献したいと考えています。このような考えの子はどのようにして育つのかを調べること。（もちろん、よりよい生活をすることや、お金を儲けることは悪いことではありませんが）

また、その子たちは、両親を大切にし、教師に対して尊敬の念を抱いていました。このような子はどうやって育つのか知りたいと思いました。

[成果]

以上の内容を北京第一実験小学校にて質問してみました。回答は、まず、品徳と生活、品徳と社会、思想を基本とする徳育教育があること。そして、社会全体や家庭で、親孝行（これは義務に近いのだろう）と礼儀、教師を大切にすることを　励行していると説明してくれました。

学校だけでなく、一般社会でも両親や教師、社会への貢献を大切にしていること、だから、あのような子が育つのだと思いました。「親孝行」は基本だなと思いました。私は、昨年母親が亡くなったので、もっと親孝行をしておけばよかったと改めて悔やんでいます（私事ですが）。

世界を意識した教育。これからは世界に目を向けた教育が必要だと思いました。受け持っている子どもたちに伝えようと思います。

[今後の日中交流]

中国にない、日本の教育の良さをアピールしたらどうか。

子どもたちが住む郷土に誇りをもち愛し、なおかつ、全国ほぼ均一な教育を受けられることは、日本が世界に誇るすばらしい教育であることをアピールする。

松本紀子

[最も有意義であった内容]

長沙市特殊教育学校での舞台発表はとても感動しました。障害者であることを感じさせないほどの演技に、驚いたとともに　生徒たちにあれだけの演技をさせる指導者の熱意、自信を感じました。その姿勢を素直に学びたいと思いました。

[訪問前の課題]

本校には、中国で義務教育未終了の学齢超過の生徒が多く在籍していることからどうして学校を途中でやめてしまったのか、その理由を探り今後の生徒指導の参考にしたいと思います。また、規則を守らず学校生活を真面目に送れない生徒が、かなりいることから中国の学校の生活指導について知りたいと思います。また、本校生徒から聞く中国の教育ではなく、現在の中国の教育について知りたいと思います。

[成果]

点数主義に走るのではなく、徳育教育、体験を取り入れた教育など、新しい観点が重視されていることを知り、その方針のもとで教育を受けた世代が今後どのように社会を変えていくのか興味を持ちました。また、平等教育が盛んにうたわれ、今の教育を受けられれば、義務教育未終了の生徒が少なくなるのか見守りたいと思いました。

[今後の日中交流]

私自身が今回の訪問を通して思ったことは、現場の先生方の生の声を聞きたかったということです。もし、今後中国の先生方が来日したら、特別なことはできませんが授業を自由に見学してもらい、その後意見交換ができると思います。

松嶋真美子

［最も有意義であった内容］

見せていただいたどのプログラムも充実しており、無駄がなかった。特に有意義と感じたのは、教育部の熱心な概要の説明と質疑応答の時間を十分確保していただいことである。概要を聞いた上で各諸学校の訪問をしたり、また学校訪問をした後に教育部を訪問したりできたことで、自分の中での問題提起と検証、まとめができた。

公立の義務教育学校だけではなく、民間の学校を訪問できたことで、比較材料ができ、より中国の教育を深く知ることができた。

［訪問前の課題］

実際の教育現場を視察することで、国語や算数はどのように教えられているのか。また、最近日本の企業でも中国人の採用が積極的であるが、日本語等の外国語教育は小学校の段階ではどのようになされているのか、確かめたい。ということが課題であった。

［成果］

国語や算数の授業を直接視察することはできなかったが、窓ごしに国語の教科書を音読する小学生の子供たち、算数ドリルを手に持って丸つけのために教卓の前に並ぶ子どもたちの様子をとおりすがりに見ることができた。日本と変わらない光景が目に飛びこんできた。しかし、中国では授業の全てを公開する習慣がない様子である。掲示物の工夫が素晴らしく、全体に教育の質の高さは十分感じた。外国語については、日本語習得にいかに力を入れて取り組んでいるか肌で感じ取れた。

［今後の日中交流］

1校単独では、交流の実現は難しい。壱岐市としてどのような交流ができるのか、まずは、私の体験を自校の職員に、壱岐市内の教頭会で語るところから始めたい。

何か事を成すには行政の力が必要である。幸い壱岐市内の壱岐高等学校にも中国語コースがある。これからじっくりと考えていきたい。

三橋康孝

［最も有意義であった内容］

それぞれの訪問先や、説明・質疑応答で様々な示唆を得たが、一番大きなことは、現在の中国に生で触れられたこと。公式訪問では、中国の公式な姿に触れられたし、自由時間の街歩きや中国人通訳との交流では、私的な、また庶民レベルの中国の一端に触れることが出来た。日本と比べ中国はとてつもなく大きく、多様である。この多様な国とどう付き合っていくか、それが日本の将来を大きく左右していくだろう。

特に印象に残っているのは、長沙外国語学校で会った日本人女性である。彼女は単身で渡航し、恐らく多くの苦労を乗り越えて中国の子供たちに日本語や日本文化を教えてきた。このような日本人の草の根の努力が国際理解や究極的には国際平和を進めて行くのだろうと思った。

［訪問前の課題］

30年前に訪れた中国と現在の中国を比べ、変化したものと変わらないものを見極めてくる。中国の教育が抱える問題点を理解し、日本と比較検討する。そしてそれが日本の教育問題を解決する参考になるのか考えてみる。

［成果］

30年前の中国は、発展途上の印象で、「みな貧しいが平等。理念の為に頑張る。」という意欲が漲っていた。「今は貧しいが20年後はすごい国になる」というのが私の感想だった。今回見た中国は、「経済的に急速な発展を遂げ、物質的に豊かになった」ことは間違いない。或る意味では日本を超えた。しかし、その結果、貧富・地域などの格差が大きくなり、国民間の亀裂が深まった。その為、エリート層の発言の中には「国の為、国民の為」という理念が存続しているが、一般レベルでは『本音と建前』の乖離が大きくなっていると感じた。中国側から『平等化』という言葉が何度も出てきたが、それをいかに推進するかがこの国の未来を決めるのではないか。それを実感した。

今回の訪問校は殆どが「実験校」と言われるようなモデル校であった。中国政府が教育、特に人材育成に力を注いでいることが良くわかった。また日本の学校が抱える「不登校」や「ドロップアウト」については「あまり大きな問題ではない」という印象だった。それは、時間的な違い（いずれ中国でも顕在化する）か、文化

的な違いなのか、それとも教育システムの違いからくるのか。それが疑問として残った。もし機会があれば、充分な経済的恩恵を受けていない地方の学校や、学力の低い生徒への対処の様子を見てみたい。

[今後の日中交流]

学校の一般職員や、生徒とのディスカッションや地域の一般市民との交流など。可能性としては、まだ勤務校やその周辺地域の様子も十分把握していないため、何とも言えません。

三好章文

[最も有意義であった内容]

全てが有意義であったと感じているが、なんといっても、個人では絶対行くことの出来ない中国の教育行政に表敬訪問し直接意見交換が出来たことや、学校現場を視察し、短い時間ではあったが生徒との交流や校長先生などと意見交換も出来たことが一番の成果であった。それぞれの訪問先での質疑応答も活発に行われ大変参考になった。

徳島県としては、湖南省の教育庁を始め湖南省の学校に多く訪問できたことは有意義であり、特に各学校での国際交流の取り組みを聞けたことが今後の交流の参考となるものであると考えている。

また、日本各地から参加されている先生方、文部科学省やＡＣＣＵの方、さらには教育部の通訳の方など、たくさんの人との出会いが大きな財産になったと感じている。

[訪問前の課題]

今後の中国（特に湖南省）との交流を進めていくために徳島県のことを少しでも知ってもらえるようにすることを使命として参加した。

中国の教育制度や教育行政について理解を深めるとともに、実際の教育現場での様子や生徒との交流を通して、中国の教育を肌で感じたいと思っていた。特に、学力向上のための取り組みについて聞きたいと思っていた。また、本年度の中国教職員の受け入れに当たって、昨年度受け入れた学校や本年度受け入れる教育委員会との情報交換等をしたいと考えていた。

[成果]

中国教育部、湖南省教育庁、上海市教育庁及び湖南省で訪問した学校において、直接挨拶する機会を取っていただき、徳島県の紹介やパンフレット、記念品の交換が出来、今後の交流の一助となったのではないかと考えている。

各訪問先で説明を受けるとともに、活発な質疑応答により中国の教育制度や教育方針、学力向上策など多くのことを学ぶことが出来た。また、国際交流が盛んな学校の具体的な取り組みがわかり参考になった。

中国教職員の受け入れを実施した学校の取り組みについての意見交換や本年度受け入れる教育委員会との打合せをする時間を別にとっていただき今後の受け入れの参考になった。

[今後の日中交流]

徳島県は湖南省と友好提携を目指して、チャーター便の就航、医療観光などに取り組み、教育委員会としても教育旅行の誘致などを進めている。本年度はこのプログラムの受け入れ以外にも、上海の教職員の教育旅行の誘致、日中21世紀交流事業を活用した交流を予定している。

また、中国や韓国など海外の学校と日常的な交流を推進するため、ICTを活用した交流モデル校を5校指定し、ウェブ会議などにより交流を進めていく計画がある。

そのような交流の中で日本と中国の姉妹校の提携を進め、生徒や教員の交流が一番効果的であると考えている。

丹羽美由紀

[最も有意義であった内容]

情報共有会。訪問して感じたことを皆で再確認することができ、良い場であったと感じた。先生方の視点の鋭さや、普段学校で実践していること、考えていること、悩んでいること、を聞くことができ，とてもよかった。また、今回の訪問において、同じことを感じていたのだということや、疑問点や不満な点なども共有することによって安心できた。さらに自分では理解できなかった話や、全く気づいていなかった点を、新たな視点として得ることができたのは大きな成果だと感じている。

[訪問前の課題]

1. 中国の教育制度について知る
2. 教育課程（特に数学）について知る
3. 学校施設・設備や時間割・特色について知る
4. 先生方との交流を行う

[成果]

1．オリエンテーション・教育部訪問，各学校におい

長沙外国語学校にて記念写真。

て話を聞けたので、だいぶ理解が増したと感じる。
2. は数学に限定しては聞くことができなかった。
3. は5校訪問したが各学校の施設を見学し、話を聞くことで各学校の違いを感じることができた。4. はほとんどできなかった。

全般的に自分から質問することができなかったのが、大きな反省点である。その分通訳していただいた内容をしっかり頭にいれたつもりだが、やはり積極的に質問をしていかないと交流はできないことを実感した。

[今後の日中交流]

最近、インドネシアの学校と姉妹校関係を結んだので、各校でお互いの国を知る勉強会を行い、定期的にスカイプで交流し、年に2・3度お互いを訪問することを進めているが、これに参加している生徒は160中の20人である。今後、教育交流を行う場合、全員の生徒が参加できれば良いと感じている。全員が行くとなれば校外学習を利用する以外はなかなか難しいので、まだ具体的な案は浮かばないのが実情です。しかし昔と違って今は、インターネットを介して交流することができるので、それが一番近道ではないかと思う。

小笠原晃

[最も有意義であった内容]

オリエンテーションで、教育改革と経済格差、都市と農村の教育格差、少数民族の教育、特別支援教育等、中国の教育事情を端的に示していただき、中国教育部及び湖南省教育庁においても、訪問校においても、視点を定めて説明を伺うことができた。最先端の教育実践の説明や見学をしながら、識字率の向上や義務教育の無償性など、その根底にあるもの、これまでの教育改革を察することができたように考える。

長沙外国語学校では、日本語の授業終了後、その教材を使いながら、わずかな時間ではあったが、二人の生徒に中国語を教えてもらった。たいへん親切で、楽しかった。その後、玄関前で体育を見学していた時、先ほどの二人の生徒が、寄ってきて、「バスケットボールを教えてあげるから、リングのところに来ないか？」と誘ってくれた。残念ながら帰る時間であることを伝えると、ちょっとさびしそうな顔をした。心に沁みる顔だった。

[訪問前の課題]

6.3.3制の日本の教育制度を当たり前と思って教員

を続けてきたが、教育改革や特区により、様々な取り組みがみられるようになり、児童生徒が国際社会で活躍できるような人材となるために、ひいては日本という国が今後も世界の中でその存在を示すためには、どのような教育制度や教育課程の編成等が望まれるのかを考えてみたい。

特に、今、中国は経済的にも世界をリードする存在であり、人材についても、かつての人口の多さという「量」から、教育を基盤とした「質」に転換しているようにも思えるので、実際の教育現場で研修したい。

また、2009 年の OECD の学習到達度調査、いわゆる PISA 調査の数学的リテラシー、読解力、科学的リテラシーのすべての分野において、参加した 65 の国と地域の中で上海がトップであった。また、上海は、経済的にも飛躍的に伸び、大都市を形成していると聞いている。その上海の教育システムや実際の学校での学習活動、キャリア教育の視点での進路指導等について興味をもっている。

日本の全国学力・学習状況調査結果では、秋田や福井など、地方の県での学力がおむね満足できる状況にあるが、中国では都市と地方との経済格差が大きく、教育制度や学習状況にも差があるように伺っているが、実際はどうであるのか、確かめてみたい。また、あの広い中国で教育行政はどのように組織され、統括されているのかということにも興味がある。

中国における教員の養成システムや社会における地位、また学校における 1 日の生活時間や 1 年間の指導の実態を知りたい。悠久の歴史をもつ中国の国語の指導内容や教科書の実際に触れたい。また一般市民が日本という国をどうとらえているのかも聞いてみたい。

[成果]

中国の国際化は、言語の教育、つまり外国語教育の実践にあるようにも感じた。英語をはじめ日本語教育にも力を入れ、その養った力で大学進学、そして経済分野への就職という流れは、ある意味でキャリア教育ではないかと感じた。世界に伍する、世界をリードする人材育成が極めて意図的に展開されているように思った。

PISA 調査の結果については、上海の外国語中学の校長が、結果は知っているが、上海全体のレベルとは受け取れないし、そもそも調査問題が学力を測る上で適切かどうかも疑問である旨の、常識的な考えを示したことに、かえって、上海の教育の確かさを見て取った。冷静に現状を分析し、国際化を視野に、信念をもって学校を経営している校長がいることが、これからますます上海の教育が台頭してくるように思ったからである。

都市部と農村部の教育格差は、トイレ等の施設の整備や寄宿舎の部屋の様子からまだまだ大きいことが推測されたが、ICT 等の設備とともに教育内容についても時代の先端を行く学校があったことは、これからの中国の教育の方向を示しているものと考える。

余談ながら、上海で魯迅公園に行き、帰途で道に迷った。その時、地図を示して帰りたいホテルを指さしたが、市場の中にいた地元と思われる人でも，さほど遠くないホテルがわからなかった。片言の英語も通じなかった。何とか大通りまで出て、子連れの若い夫婦に道を尋ねると、夫がわざわざホテルの見える通りまで､案内してくれた。「謝謝」の言葉しか言えなかった。英語力、地図の見方、道徳心、すべてが凝縮した、焦った 30 分余りの時間であった。モノの値段があってないような価値観の中国だったが、この若夫婦のことは忘れられない。せめてこの夫婦の写真を一枚撮っておくべきであった。国際交流の成果は、この思いやりの行動、心遣いとして私の心に深く残っている。と同時に、自分がそうできるか、自分の教育によって、そのような子どもたちを送り出せるか、問われた上海の朝の一時であった。

[今後の日中交流]

本市は、今年度「音のまち大仙」というキャッチフレーズで、小・中学校の楽器購入のサポートをして、音楽的風土の醸成を図ろうとしている。小・中学校のマーチングバンドの活動も盛んで、昨年度は市内の中学校が日本一の栄冠に輝いており、市では全国の音楽家を対象とした「新人音楽コンクール」も毎年開催している。また、小学校には公立小学校としては珍しいパイプオルガンが設置されている学校もあり、昨年度中国教員団の訪問の際には､演奏を鑑賞してもらった。その際、小学校 5 年生の教材となっている「ジャスミン (中国名：茉莉花)」を一緒に歌った授業を思い出すと、言語を超えた交流の一つとして、音楽による教育交流ができないかと考える。

上海甘泉外国語中学では、今後、野球を活動に加えるということであった。

本市は野球においても盛んな土地柄であり、小学生や中学生の野球の交流試合なども計画できないかと思っている。そうであれば、中学校の部活動の指導に少し携わった経験をもつ自分も、お役に立てるのではないかと考える。

また、本市では、市の男女共同参画･交流推進課に、

韓国の国際交流員（CIR）1名、教育委員会にオーストラリアからの国際交流員1名が採用されている。中学校の韓国への修学旅行に際しては、国際交流員が学校に出向いて事前学習を支援している。中国との交流についても、国際交流員などを活用できないか考えてみたい。

直接の交流ではないが、8月9日（火）開催予定の大仙市教職員研究集会の教育フォーラムにおいて、国際交流についての啓発の意味を込めて、今回、研修に参加した、大曲小学校　高橋猛教諭から「中国の最新の教育情報」を発表してもらう予定である。研究集の対象は大仙市内教職員等全員の約600名である。

酒井淑子

[最も有意義であった内容]

長沙特殊教育学校の歓迎セレモニーで聴覚障害を持つ生徒達がダンスを披露してくれたが、舞台袖3か所で指導の先生が音が聞こえない生徒達のためにずっと指示を出されていた。障害はあるが身体全体で自己表現をしている生徒たちの姿と影で指導されている先生の姿に、見えない部分でどれだけ努力されているのかと頭が下がる思いだった。

[訪問前の課題]

1. 私は家庭科の教員なので、専門教育の中でどのような技術指導をなされているか知りたい。
2. 中国での学力向上に向けた取り組みについて理解する。

[成果]

1. 中国では、家庭科という教科は昔よりないため、一般の学校では家庭科に関する指導は実施されていなかった。ただ、長沙市特殊教育学校では，障害のある生徒に対して，職業トレーニングの一つとして縫製の技術指導が行われていた。縫製技術も高く、卒業後の進路保証のための教育がなされていることを理解できた。
2. 中国では、まず1日の授業時間が長く8:00～17:00頃まで授業が実施されていた。部活動などはないのかと疑問に感じたが、目一杯学校での授業が組まれていた。日本でも、もちろん家庭での学習は必要であるが、学校での学習時間確保が緊急の課題かと思われた。

[今後の日中交流]

1. 昨年度、中国の方との交流を実施したとき、調理実習を一緒に行った。最初は尖閣諸島の問題もあり、本校の生徒も不安に思うところがあったが、実際に実習に入ると和気あいあいとした雰囲気で、それまでの不安が払拭された。

相互理解のためには、直接教員・生徒の中に入り、同じ体験を行うなどしてのコミュニケーションづくりが大切かと思われる。

2. 本校のような農業高校では、低農薬での野菜作りのための取り組みの紹介や食品加工実習、福祉・介護実習等も考えられる。
3. 地域的に言うと、島原は湧水で有名だが、市内の至る所で水が溢れておりそれを直接飲めるという体験も中国の方にとって興味あることかもしれない。

柴田眞弓

[最も有意義であった内容]

温和な相庭団長のお人柄で、個性豊かな団員が無事に活動を全うすることができました。

[訪問前の課題]

日中の交流の懸け橋となるべく、美祢市に中国の教職員を招へいし、今後の交流の仕方を模索する事です。

交流のテーマは「中国と日本、もっともっとつながろう！」であり、つながり方としては、『いつも　にっこり！心　ほっかり！』を合言葉に、たとえ国は違っても、心と心は必ず相通じる事が出来るという事を実証していきたいと考えていた。

[成果]

表敬訪問で受けた中国教育部の温かさと歴史の重さ・友好の気持ちがスタートであったため、中国への信頼感が高まった。

北京・長沙・上海と3都市を訪問させていただき、特色のある学校の訪問を重ねる事で、中国教育の一端を直接肌で感じる事ができた。

また、参加者が日本各地からの参加であり、中国のことだけに留まらず、日本の教育について語り合える事ができたのも、大きな成果といえる。なぜなら、私たちは、各地で教職員を務めているが、日本の教育といえども、とかく全体像が見えにくいと考えるからだ。

日中の交流にとどまらず、私たち団員の結束と交流の輪のスタートとなった事が、私自身の大きな成果といえる。

[今後の日中交流]

山口県は本州の西の玄関口であり、和の文化漂う「西の京」である。30年前から中国の山東省と友好都市

を結び、美祢市においては、棗荘市との友好関係が続いている。

美祢市の今後の交流としては、今秋訪れる中国教職員に、美祢市の特徴を生かし、美祢市でしか出来ない交流を肌で感じ取って頂きたいと考えている。そしてその後のつながりを大切にして、中国教職員の勤務する学校・教員の出身地等とのつながりから、少しずつ交流の仕方を見出していきたいと考えている。

方法としては、市レベルでは、友好関係を築き、学校・地域レベルでは、ITや郵便等でお互いを知りあう活動を継続的に行っていくことが考えられる。

内容としては、美祢市教育を伝えながら、特色ある学校力・地域力を知っていただくことから始めたい。また、中国の事も紹介していただく事で、美祢市の子ども達にとって､国際感覚を身に着けさせていきたい。

鈴木明彦

[最も有意義であった内容]

有意義ななことと言えば、みな有意義であった訳ですが、1番と言えば、昼食時に同じテーブルに子育て中の湖南省の職員が同席していただき、ざっくばらんに質問ができたのがよかった。公でないところで本音を聞くことができたような気がした。2歳半より寄宿舎に入れてしまう話を初めとして、そうした中国の実情をどう思っているか聞くことができた。

甘泉外国語学校の2人の優秀な女子高生や長沙外国語学校で訪問を終えて、バスに乗り込むまでの時間、体育をしていた子どもたちを捕まえてお話ができたことも有意義であった。

また校種の異なる4校を訪問できたこともよかった。それぞれが目的も違えば方向性も異なるけれど精一杯努力をしている様子が伝わってきた。

[訪問前の課題]

1. 学校間に格差があると聞いていた。その格差はそのまま貧富の差に繋がっていかないのかという疑問
2. 日本での算数は基本的に問題解決形の学習を目指している。どのような授業をしているのか知りたいということ。
3. 一人っ子政策のため「子どもは甘やかされて育つ」と聞いている。子どもは不登校に、親は学校に対しての圧力や批判をする方向に変わるという形にならないかという疑問
4. 日本のゆとり教育に対して、中国では過当競争が激しく受験も大変と聞いている。子どもたちへの弊害はないのかという疑問。

[成果]

1. 地域に帰属した方がいいということで少し変わりつつあるのかなと思う。しかし、寄宿制があるなど保護者の目指すところはよりエリートでしょうか。
2. 残念ながら授業を参観することができなかった。
3. 不登校やモンスターペアレンツは存在する。不登校に対する認識は日本とは違うようだ。
4. ゆとり教育という言葉はなかったが、宿題の規制や放課後の確保などを図っているようだ。

[今後の日中交流]

1. 子どもと一緒に給食を食べる。
2. 朝から集会等の活動を見ていただく。または午後からの訪問ならば、委員会やクラブ活動なども見ていただく。
3. 授業参観
4. 子どもとの交流会を開く。
5. 中国の様子を通訳を通して話してもらう(授業として)。
6. 教え方について互いの方法を紹介する(研究授業ほどでなく)。
7. 夕食などに一般の教諭やＰＴＡ会長等が参加する(宴会でもいい)。
8. PTA等の活動についても理解してもらう時間を作る

一人の小学校の教師として今学校でできることです。うまく運べば必ずできると思います。

髙橋龍雅

[最も有意義であった内容]

本プログラム全体が大変有意義であった。特に挙げるとすれば，以下の二点である。

1. 学校・教育施設の訪問。各種学校や教育部等を訪問できたことは、決して観光旅行では訪れることはできないこともあり、貴重な体験となった。中国の教育事情や教育政策について理解を深めることができ、そして、学校で学ぶ子どもたちを自分の目で見ることができたことが何よりの収穫である。この体験が、教育に対する新たな視点の獲得と日本の教育のすばらしさの再認識につながった。本プログラムの目的の一つは十分に達成できたと思う。
2. 多くの人との出会い。オリエンテーションを含めて９日間という短い期間ではあったが、訪問先で出会っ

上海甘泉外国語中学では、東日本大震災被災地の高校生へ励ましの文集が訪問団に手渡された。

た中国人だけではなく、参加者の方々とも交流を深めることができたことは、大きな財産となった。立場や校種，地域の壁を越えて、学校教育に限らず幅広いテーマでお話しさせていただいたことは、自身の教育活動において大いに勉強となった。心から感謝を申し上げたい。

また、帰国後に、訪問先でお世話になった中国人の方からメールをいただき、メール交換による交流が始まった。これも大きな収穫の一つである。個人レベルの国際交流ではあるが、今後も日中の友好を深めていきたい。

［訪問前の課題］

1. 震災支援に対する御礼。今回の東日本大震災では、中国から直接的、間接的に多大な支援をいただいた。被災地を代表する気持ちで、支援に対する感謝の気持ちを伝えたい。

また、地域での防災対策や小中学校での防災対策、防災教育における実践例など、ＥＳＤと関連付けて理解を深めたい。

2. 中国と日本の教育における共通点・相違点から、今後の自身の教育活動における改善策・課題を探る。授業や学校施設の視察，中国の教職員との交流から、教育における共通点・相違点を知り、今後の教育活動への参考としたい。

［成果］

1. については，各訪問先で被災者へのお見舞いと励ましの言葉をいただき、それ対する感謝の気持ちを伝えることができた。また､参加者の学校や委員会からも、直接気仙沼へ支援したいという申し出があり、大変有難かった。重ねて感謝申し上げたい。

防災教育については、長沙市特殊教育学校での、防災センターで見たような展示室や体験設備が整っていたことに驚いた。中国国内で導入されている学校はまだ数少ないということであるが、防災教育に対する意識が高まってきていることが伺えた。

2. の教育における共通点・相違点ついては、参考となる点が多々あった。「教員の質の向上が教育の質の向上になる」「家庭学習はすべての教育に欠かせない」という言葉が印象的であった。日頃教育現場で耳にしている言葉だったので、教育にかける情熱は、日本も中国も同じであるということを強く感じた。一度外の世界を見ることは、日頃の教育活動をふり返るために非常に有効であるということに改めて実感させられた。大いに参考となった。

［今後の日中交流］

学校規模での実施となると，中国人に限らず外国人との交流ということに対して，生徒だけではなく教職員にとってもまだまだ抵抗感がある。昨年度迎えた中

国教職員訪問団との交流も，継続した交流には発展しなかった。どのような交流を行うにしろ，国際交流に対する意識付けが重要である。必要性が感じられなければ，継続するのは難しい。

まずは，児童生徒，教職員がユネスコの活動を知り関心をもつきっかけが必要だと考える。ユネスコの国際交流活動についての講演会やワークショップなどを各学校（ユネスコスクール認定校）で行うことで、国際交流への意識付けになると思う。

また、中国の学校と直接交流することは現時点では難しいので、留学生や国内在住の中国人といった身近な交流からならば、実現や継続させられる可能性が高いのではないかと考える。

高橋 猛

[最も有意義であった内容]

何よりも、学校訪問で授業を参観できたことが有意義であった。

学校によっては、授業の様子をあまり公開しないところもあったが、学校側の説明だけでは分からない部分もあるので、生の授業を見るのがいちばんである。

今回の事業では、各種学校の訪問があって、とても良いプログラムであった。

[訪問前の課題]

PISA調査で学力１位となった中国の教育現場を直接視察し、学力向上のための取り組みや子どもたちの学習意欲・学習習慣を調査する。

[成果]

優れた人材を育成するという国家レベルでの取り組みが、中国全体の学力向上につながっていることが分かった。

授業を参観することで、子どもたちの学習意欲や学習に向かう姿勢、授業の進め方、板書の仕方、ＩＣＴの活用の仕方、子どもたちのノートの取り方、授業規律などの現実を知ることができた。これは、統制されている情報とは違う間違いのない子どもたちの姿であった。

[今後の日中交流]

中国の子どもたちと文化の交流を図っていきたいと考えている。

特に秋田県大仙市は「花火の町」として有名であり、総合的な学習の時間でも花火の歴史について学ぶ機会もある。湖南省の長沙も花火が有名という話を聞いたので、お互いに花火を紹介し合い、交流ができればと思っている。

本校にはテレビ会議システムが導入されておらず、また、中国はSkypeが使えないとのことなので、子どもたちのまとめたものを交換してお礼の手紙を書くなどの交流が考えられる。

相手の学校さえ見つかれば、それほど難しくなく取り組めると思う。

寺尾俊二

[最も有意義であった内容]

今回のプログラムで五つの学校を訪問した。その中で、一番生徒と触れ合ったのは長沙外国語学校でした。日本語の授業を見せていただき、授業後も多くの生徒と言葉を交わし、明るく活発な生徒に心温まることができました。鹿児島から来ている日本人の女性教師が「ありがとう　さようなら」の日本の歌を指導されていて、思わず一緒に歌いました。他の先生にも日本語が話せる先生がいて、とても安心して訪問することができました。

また、生徒はいませんでしたが、上海甘泉外国語中学での「桜祭り」のビデオでした。第一外国語を日本語にしている学校で、二人の女子生徒の流暢な日本語には驚きました。さすが中国一だと思いました。できれば授業も見てみたかったと思います。

最後に、中国教育部の訪問です。中国政府の教育にかける思いが伝わってきました。どの学校や教育委員会へ行っても９年間の義務教育と教員の資質向上のための研修、都市部と農村部の格差の解消など、中国政府の指導が行き渡っていると感じました。

[訪問前の課題]

1. 中国の教育制度、文化、施設・設備について、事前に学習したことを訪問を通して理解すること。
2. 昨年度受け入れた教育委員会や教職員との交流を図り、本年度中国教職員を受け入れるための具体的な準備について意見交換を行うこと。
3. 荒尾市が「辛亥革命百周年」記念行事に取り組んでいるので、今後どのような交流ができるのか、参加の先生方や訪問する学校の状況を把握すること。

[成果]

1. 急激に発展してきた中国の三つの都市と教育部や教育委員会、学校訪問を通じて、中国政府の教育に力を入れていることがわかりました。特に、学力向上のた

めには教員の資質向上が大切だということを学ぶことができました。また、農村部の教育や不登校などの課題があることもわかりました。
2. 今回の訪問で日本国内の先生方とたくさんの交流ができて、いろいろな情報を得ることができました。これが一番の収穫だと思います。また、今年度受け入れる教育委員会の先生方にＡＣＣＵの佐々木課長から時間をとって説明していただいたのがよかったと思います。
3. 孫文を精神的に財政的に支えた「宮崎兄弟の生家」のパンフレットを教育部を始めすべての訪問先にお渡しできたことは、今後の交流に生かしていけるものと思っています。

[今後の日中交流]

本市では、日中友好推進会議があり、大人ではありますが本年度、上海と南京、中山市（市長ほか代表団のみ）に 20 名程度派遣することになっています。その席で平成 24 年度に中学生 20 名程度を上海に派遣する計画をお願いすることになっています。今年 10 月の中国教職員招へいプログラムによる小中学生との交流で、来年度への派遣につなげることができるのではと考えています。

また、今年 10 月に受け入れる学校やホームビジットの家庭へは引き続き交流をお願いしたいと考えています。メール、文通などできるところから交流できるよう 10 月の受け入れに向けて準備していきたいと考えています。

植村訓子

[最も有意義であった内容]

今まで「中国における教育」についての知識は , 皆無にも等しく、今回の研修で初めて知ったことがたくさんあった。ACCU から送付された訪問校の概要説明や出発前日にオリエンテーションで「中国の教育事情」を事前学習することにより、実際訪れた時 , 余裕を持って話が聞け , 疑問や質問も出て、もっと知りたい情報入手も容易になったと思われる。

こういう機会でもなければ訪れることができない中国の教育の中枢部・公的機関に行けたこと、この短期間にこれほど多く各種の学校を訪問できたことは本プログラムならではのものであり、意義深い。

[訪問前の課題]

中国の小・中・高校教育において、教科書の中で日本についての記述があるのか？取りあげられている場合、1. 教科は？ 2. どのような内容で、何時間程度か？日本に対する学生たちの印象はどんなものか？日本や日本人をどのように捉えているか？

中国における高校・大学への進学率と現在、最も学生たちに好まれる職種（職業）・資格にはどんなものがあるのか。

日本と中国の間の歴史や文化の変遷を取りあげ、展示した博物館・歴史資料館は、中国本土にはどのくらいあるのか？どの時代の日本との関係を、どのような視点で紹介しているのか知りたい。

中国古来の町並みや住居はどの地域にいけば見学できるか。その特徴や構図を知りたい。

現在使用中の教科書に、中国が取り上げられている。具体的には、京劇・食に関すること・万里の長城・パンダの生息地などであるが、これらに関する実写、あるいは生きた資料を手に入れることができるか。(例：劇場見取り図や上演パンフレット、見学地の案内図・広報紙など)

[成果]

上記の課題は , 訪問校、オリエンテーション、中国教育庁や湖南省教育庁での説明に加え、自分自身でも質疑応答の時間に直接たずね、王さん初め交流関係職員やガイドさんなどにもお聞きし、ほぼ 80 パーセントは解決できた。何でも答えてくださる王さんの存在は大きく、これほど深くしかも短期間で、日本の文化・伝統、教育、経済等に精通するとは、中国はやっぱりすごいワンダーランドだと思った。多くの写真や解説を活かして、授業に活かせたらと考えている。（例：旅の中で最も楽しんだ中国料理は家庭科〈食物分野〉、生徒の絵画作品は美術科、岳麓書院や博物館は総合的な学習や社会科、英語で書かれたポスターや掲示物は英語科、漢文は国語科など）

[今後の日中交流]

まず、校長に記憶が新しい時に時間を設けてもらい、口頭で今回の研修内容を報告。次に、教育委員会に簡単な報告をするとともに、教育長のもとに、資料を持って 2 回に分け、研修報告に出向いた。初めての受け入れが回を重ねるには具体的な事例を持って本事業がいかに、有意義なものであるかを最高責任者に知ってもらうことが初めの一歩だと考えたためである。離島にあって、国際感覚やコミュニケーション能力を磨く場が少ないだけに他の地域以上に教師には貴重な経験になったことを伝えた。

昨年度に本校で実施した給食を通しての交流会は、

授業参観直後ということもあって、クラスによっては会話が弾み,子どもたちと楽しく時を過ごせた。また、本当に簡単な中国語を使って、自己紹介し、それに拍手をもらったそれだけで、中国（語）に興味関心をもった生徒もでてきた。また、共有会で伺った近江市の小学校で実践された研究授業参観とその後の全体会の内容は参考になるのではないだろうか。参観していた中国教師の解き方で「わかった」の声をあげた生徒の事例を聞いて、ことばの壁を越えて両者間でこどもたちを媒体とし、教授法の交換や研修ができるのではないかと思った。もしも事前準備の時間があれば、中国を題材にしている単元では、T-Tを行い、多文化理解を仕組むことは可能ではないだろうか？

個人レベルの交流では，たまたま、声をかけメールアドレスを教えてもらった日本語のできる中国教師との交流ができないかと考えている。きっかけは、「日本の英語の教科書の中に中国が各学年で登場するが、あまり知らなかったので今回の訪問は有意義だった」と話すと、「中国について知りたいことがあればメールで尋ねてください。知っていることやできることは協力します。という流れになった。つい数日前に写真と交流してもらえるかとメールで問い合わせた。もしも、何らかの進展があれば、ACCUにメールでお知らせしたい。

吉田克義

[最も有意義であった内容]

私にとっては、今回のプログラムのすべてがたいへん有意義な内容で、どれも甲乙つけがたいものとなりました。しかし、強いて挙げるとすれば長沙同升湖国際実験学校の訪問はたいへん興味深い視察であったと思います。

同校は、先に述べた通り、中・濠合弁出資の企業が経営する私立学校であり、学校経営だけでなく、不動産や建設業、ホテル経営など、多角的な経営に取り組んでおり、学園都市の建設を進めているようでした。質疑応答で校長先生から伺った学力向上の取組では、北京師範大学と共同し、記憶力や集中力を高め、受験の技術力を高めるなどの研究が成されており、受験競争をできるだけ緩和したいと考えている中国教育部の考えとは大きく相違していました。「企業（株主）の利益」と「教育のあり方」という一見相反する２つのバランスをとりながら経営することの難しさが、社会主義体制の中で経済の自由化を進める中国の舵取りの難しさを感じました。訪問した学校の生徒の多くが、「将来は公務員になって、国のために働きたいです。」と答えていました。公務員によって社会が強力に管理されている中国の実情を窺うことができたように思います。

[訪問前の課題]

中国の教育政策や実際の教育現場を視察し、わが国の教育と比較しながら、見聞を深め,今後の教育のあり方について考察したい。

最近発展がめざましい中国の都市や文化・人々の生活などを視察し、今後の授業に生かしたい。

気仙沼市が力を入れている環境教育（ESD）の分野では、どのような取組が行われているのか。また、共同・協力して取り組める国際交流について考えたい。

[成果]

中国では「素質教育」による受験偏重教育からの立脚を目指しており、生徒の特性や個性を伸ばす教育に力を入れていました。また、「職業教育」を進め、生徒の将来に役立ち、興味・関心を生かし、自信を持たせる体験的な学習を重視していました。また、教員の指導力向上に向けて研修制度を設けるなど、日本と同じような取組が見られます。しかし、家庭での学習時間は、一人っ子政策による保護者の子どもへの期待の高まりで塾へ通わせる生徒も多く、一人あたりの家庭学習時間も、日本より多いように思います。さらに、外国語については､コミュニケーションの手段（道具）として、会話を重視した指導がなされていました。生徒たちは自分たちが習っている日本語や英語を使い、私たちに積極的に話しかけていました。活用型の学力の育成に大きく関わっているものと思われ、中国がPISA調査の結果で第１位を獲得できた理由を理解できたように思います。こうしたことから、日本でも、生活や実社会で応用可能な活用型の学力の育成やコミュニケーション能力を支える言語力の育成が必要で、新しい学習指導要領の方針は正しく、各学校でのＥＳＤの推進が活用型学力の育成につながると強く感じました。

百聞は一見に如かず。私が想像していた以上に中国の都市部は発展しており、中国のGDPが日本を抜いて世界第２位となったことが様々な場面でよく理解できました。

中国の諸学校では国際交流や異文化理解といった分野でのESDは進んでいましたが、気仙沼市が力を入れている環境学習の面では、例えば地球温暖化とCO

$_2$との関係など、各教科での指導にとどまっているようでした。こうしたことから、環境教育やエネルギー教育を通して、公害問題やエネルギー問題が深刻化している中国の諸都市と交流を深めることができるのではないかと思いました。

［今後の日中交流］

今回訪問した諸学校では、外国語教育が盛んで、学校や省単位で日本を含む諸外国と国際交流を積極的に行っていたことから、日本国内の諸学校が交流を希望するならば、歓迎していただけるように感じました。その時に、今回訪問させていただいた私たち訪問団のメンバーが橋渡しになることで、国際交流の第一歩を比較的簡単に開くことができるように思います。教職員や児童・生徒の相互訪問は、時間や費用の関係上そう簡単ではないかと思われますが、ACCU や文科省からアドバイスや補助を受けながら、プログラムの内容を工夫し、教育委員会レベルで交流していくのが望ましいように思います。また、インターネットやＥメールを活用して、意見の交換を行ったり、学習の成果を発表したりするなどの小規模な国際交流ならば、学校や個人レベルで比較的安価で容易に交流することができると思います。

個人的には、環境問題や防災教育の分野で小規模でも交流してみたいと考えています。無理をせず、できることから始めることが大切ではないかと思います。国際交流を円滑に幅広く進めるためにも、ACCU が中心となって、国際交流を行った際に用いた計画書や配布資料、プレゼンテーション資料、実施後の反省などのデータをその時の記録写真とともに、ホームページにアップし、会員が自由に見たり、使えたりできるようにしてはどうかと思います。また、国内での情報交換のためにも、教職員交流プログラムに参加した先生方の連絡先やメールアドレスなどの情報を共有できればと思います。

オリエンテーションの発言者［発言順］

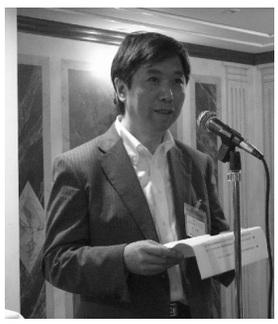
5月28日　東京にて

国連大学大学院
加藤敬事務局長

ユネスコ・アジア
文化センター
島津正數事務局長

文部科学省初等教育局
参事官付
斎藤康行参事官補佐

文部科学省生涯学習政策局
調査企画課
新井聡専門職



中華人民共和国
駐日本国大使館
史光和一等書記官

◆資料 1.
中国政府日本教職員招へいプログラム

（2011 年 5 月 29 日－6 月 5 日：中国　北京市、湖南省長沙市、上海市）

実 施 要 項

1.　背景

（財）ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、国際連合大学の委託を受け「ACCU 国際教育交流事業」として、中国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施してきました。2002 年より開始されたこのプログラムにより、これまで約 1,100 名の教職員が日本を訪問し、我が国の教職員との交流を深め、日中両国間の相互理解と友好の促進に貢献してきました。

2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年約 10 名の日本の教職員を中国へ派遣してきましたが、これら交流事業の成果が中国政府に評価され、日中国交正常化 35 周年を記念する 2007 年からは参加人数を倍増し、中国政府教育部による招へいプログラムとして実施され、さらなる交流の発展を目指すこととなりました。

2.　目的

(1)　中国の教育制度および教育課題への理解を深め、成果を学校・地域の教育活動に還元すること
(2)　教育現場での交流・意見交換を通し、日中教職員間の持続的な相互交流を育み、日中両国の教育の質を高めること
(3)　中国の文化全般への理解を深めること
(4)　日中両国の相互理解と友好を促進すること

3.　活動内容

(1) 中国の教育政策の現状と課題についての講義
(2) 中国の教職員および児童生徒との、教育現場での交流
(3) 学校および教育・文化施設の視察

4.　日程

2011 年 5 月 29 日（日）から 6 月 5 日（日）　（8 日間）
_5 月 28 日（土）午前より都内にて事前オリエンテーションを実施予定

日付	日程	訪問先	活動
5 月 29 日（日）	第 1 日	北京市	羽田出発 北京到着
5 月 30 日（月） ｜ 6 月 4 日（土）	第 2 日 ｜ 第 7 日	北京市 湖南省 上海市	中国教育部表敬訪問 教育委員会表敬訪問 学校訪問 教育・文化施設等見学 「中国教職員招へいプログラム」参加者との懇談
6 月 5 日（日）	第 8 日		上海出発 日本の各地へ到着

注：訪問先、活動内容については変更の可能性があります。

5.　参加者

下記の教職員、随行員、計 25 名程度の参加とする。

(1) 2010-2011 年中国教職員招へいプログラム受入れ教育委員会が推薦する教職員
(2) 上記プログラムの東京近郊受入れ校の教職員

(3) 2011-2012 年中国教職員招へいプログラム受入れ教育委員会が推薦する教職員
(4) 国際連合大学、文部科学省、ACCU の職員

6．参加資格

(1) 日本国民であること。
(2) 所属する学校等から推薦を受けた、初等中等教育教職員（教育行政職員を含む）であること。特に、在職 5 年～15 年程度の教員が望ましい。
(3) 将来にわたり中国との具体的な教育交流の推進に寄与できること。特に、中国との学校／教員／児童生徒／地域間の各交流、または定期的な情報交換等を推進する立場にある者が望ましい。
(4) 健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
(5) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的に参加ができること。

7．応募手続

関係各自治体の教育委員会、または学校は、参加者を選定し、所定の派遣候補者データシートを揃え、所定の期日までに ACCU へ推薦すること。　＊提出された文書は返却されません。

8．評価と報告

参加者は、プログラム終了後、所定の報告用紙により ACCU に報告書を提出する。

9．渡航費等諸経費

（1）中国政府が下記について負担する。
- 中国国内の移動に要する交通費
- 中国滞在中の宿泊費
- 中国滞在中の食費　＊中国政府から日当は支払われませんが、中国滞在中の食事が手配されます。
- プログラムの運営に必要な経費（通訳等）

（2）ACCU が下記について負担する。
- 日本（往路：羽田空港、復路：成田・関西・福岡空港のうち最寄り空港）と指定された中国の国際空港間のエコノミークラス航空券
- 日本国内交通費：オリエンテーション日の会場までの交通費および帰国日の到着空港からの交通費の定額（ACCU の規定に準ずる）
- オリエンテーション当日（5 月 28 日）の宿泊が必要な参加者について、日当の定額および宿泊
- 帰国日（6 月 5 日）の日当の定額（ACCU の規定に準ずる）

注 1：オリエンテーション当日、開始までに到着可能な交通手段がない場合に限り、ACCU が前日の宿泊（手配と経費負担）および日当を負担します。
注 2：帰国当日中に居住地に到着可能な交通手段がない場合に限り、ACCU が当日の宿泊費を負担します。

(3) 各参加者の負担
- 海外旅行保険料：プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において加入しておくこと。
- 上記（1）、（2）以外の諸経費

(4) 旅券と査証について
- 旅券（パスポート）：入国時に 6 ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
- 査証（ビザ）：一般旅券の場合は、ビザの取得は不要。

10．通訳

財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）　人物交流課　（担当：米島、村上）
〒162-8484　東京都新宿区袋町 6 番地　日本出版会館
TEL: 03-3269-4498/4435　FAX: 03-3269-4510

◆資料２.

中国政府日本教職員招へいプログラム

（2011年5月29日－6月5日：中国　北京市、湖南省長沙市、上海市）

日程

日時	月日	地名	現地時間	便名	予定
	5月28日 （土）	各地 大森	 9:20 9:30-15:30	各自	各地より大森へ 会場着、受付 オリエンテーション （途中、昼食懇談会を含む） ＜都内　ホテルモントレ山王泊＞
1	5月29日 （日）	大森 羽田 北京	10:30 11:15 13:50-16:30 16:30 18:00	CA182	チェックアウト、ホテル発 羽田空港着、空港にて昼食 空路、羽田空港から北京首都国際空港へ 北京空港着 ホテル着、チェックイン、夕食 ＜西西友誼酒店泊＞
2	5月30日 （月）	北京	08:30 09:00 09:30 11:40 14:00-16:00 17:00 18:00		朝食 ホテル出発 中国教育部表敬訪問 昼食（教育部主催） 北京第一実験小学校訪問 ホテルへ戻る 夕食 ＜西西友誼酒店泊＞
3	5月31日 （火）	北京 長沙	07:30 08:30 11:25 13:30 14:00-15:00 15:00 17:30 19:00	CA1349	朝食、チェックアウト、北京首都国際空港へ移動 北京首都国際空港着 空路、長沙市へ 長沙空港着 昼食 岳麓書院見学 夕食（火宮殿） ホテル着、チェックイン ＜紫東閣華天大酒店泊＞
4	6月1日 （水）	長沙	08:30 09:00-11:00 12:00-13:00 15:00-17:00 17:00 19:00		朝食 長沙市特殊教育学校訪問 昼食 長沙外国語学校訪問 夕食、ホテルへ戻る 第1回情報共有会 ＜紫東閣華天大酒店泊＞

5	6月2日 （木）	長　沙	08:00 09:00-12:00 12:00-13:00 13:30-16:30 17:30		朝食 長沙同升湖国際実験学校訪問 昼食 湖南省博物館、湘繡研究所見学 ホテル着、夕食 *＜紫東閣華天大酒店泊＞*
6	6月3日 （金）	長　沙 上　海	08:30 09:30 12:30-13:30 13:30 15:35 16:55 20:00	 MU5362	朝食、チェックアウト 湖南省教育庁表敬訪問 昼食（湖南省教育庁主催） 長沙黄花国際空港へ移動 空路、上海市へ 上海虹橋空港着 ホテル着、夕食 *＜上海市虹口世紀大酒店泊＞*
7	6月4日 （土）	上　海	08:30 09:00-11:30 12:00-13:00 14:00-17:00 17:30 18:30 19:00		朝食、出発 上海甘泉外国語中学訪問 昼食（上海市教育委員会主催） 豫園、城隍廟見学（自由見学） 夕食（城隍廟エリアにて） ホテルへ戻る 第2回情報共有会 *＜上海市虹口世紀大酒店泊＞*
8	6月5日 （日）	上　海 各　地	06:30 08:00 9:30-12:30 9:55-13:50 11:55-14:25	 CA921 CA929 CA915	チェックアウト（車内で朝食） 上海浦東国際空港着 空路、関西空港へ 空路、成田空港へ 空路、福岡空港へ 各地へ移動、帰宅

注意：発着時間、交通機関などは変更になることがあります。

◆資料 3-1. 参加者リスト（20 名）

1	相庭 建次	AIBA Kenji	鎮西学院高等学校	副校長	長崎県
2	福田 洋一	FUKUDA Yoichi	多摩市教育委員会	教育指導課 統括指導主事	東京都
3	橋本 正明	HASHIMOTO Masaaki	近江八幡市立武佐小学校	教頭	滋賀県
4	速水 政明	HAYAMIZU Masaaki	白鵬女子高等学校	副校長	神奈川県
5	土方 美和子	HIJIKATA Miwako	多摩市立鶴牧中学校	主幹教諭	東京都
6	鎌塚 房夫	KAMATSUKA Fusao	板橋区立板橋第六小学校	主幹教諭	東京都
7	松本 紀子	MATSUMOTO Noriko	荒川区立第九中学校	主任教諭	東京都
8	松嶋 真美子	MATSUSHIMA Mamiko	壱岐市立芦辺小学校	教頭	長崎県
9	三橋 康孝	MITSUHASHI Yasutaka	千葉県立佐倉南高等学校	教諭	千葉県
10	三好 章文	MIYOSHI Akifumi	徳島県教育委員会	学校政策課主幹	徳島県
11	丹羽 美由紀	NIWA Miyuki	筑波大学附属坂戸高等学校	教諭	埼玉県
12	小笠原 晃	OGASAWARA Akira	大仙市教育委員会	教育指導部教育指導課 課長	秋田県
13	酒井 淑子	SAKAI Toshiko	長崎県立島原農業高等学校	教諭	長崎県
14	柴田 眞弓	SHIBATA Mayumi	山口県美祢市教育委員会	学校教育課課長補佐	山口県
15	鈴木 明彦	SUZUKI Akihiko	板橋区立成増小学校	主幹教諭	東京都
16	髙橋 龍雅	TAKAHASHI Ryuga	気仙沼市立松岩中学校	教諭	宮城県
17	高橋 猛	TAKAHASHI Takeshi	大仙市立大曲小学校	教諭	秋田県
18	寺尾 俊二	TERAO Shunji	荒尾市教育委員会	教育振興課指導主事	熊本県
19	植村 訓子	UEMURA Noriko	壱岐市立石田中学校	教諭	長崎県
20	吉田 克義	YOSHIDA Katsuyoshi	気仙沼市立唐桑中学校	教諭	宮城県

2. 主催者代表 (1 名)

21	加藤 敬	KATO Takashi	国際連合大学	大学院事務局長

3. 文部科学省同行 (2 名)

22	齋藤 康行	SAITO Yasuyuki	文部科学省	初等中等教育局参事官付参事官補佐
23	榊 陽子	SAKAKI Yoko	文部科学省	大臣官房国際課企画調査係

4. 事務局 (財団法人ユネスコ・アジア文化センター)(2 名)

24	佐々木 万里子	SASAKI Mariko	(財) ユネスコ・アジア文化センター	人物交流課課長
25	米島 百合子	YONESHIMA Yuriko	(財) ユネスコ・アジア文化センター	人物交流課

◉国際連合大学 2010-2011年度国際教育交流事業◉

中国政府日本教職員招へいプログラム
実施報告

2011 年 9 月

編集・発行

財団法人ユネスコ・アジア文化センター
［ＡＣＣＵ］

〒 162-8484

東京都新宿区袋町 6 番地　日本出版会館

電話　(03)3269-4498

Email　exchange@accu.or.jp

URL　http://www.accu.or.jp

Printed in Japan by Hokuetsu Printing Inc. [100]

©2011 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

◎表紙・扉に配したカットは、
長沙馬王堆一号前漢墓から出土した帛画の模写したうちの部分です。